



1



0030088-000

特231-450

保険国人記

安蒜頑涕生・著

保険興信社

昭和4

ADJ

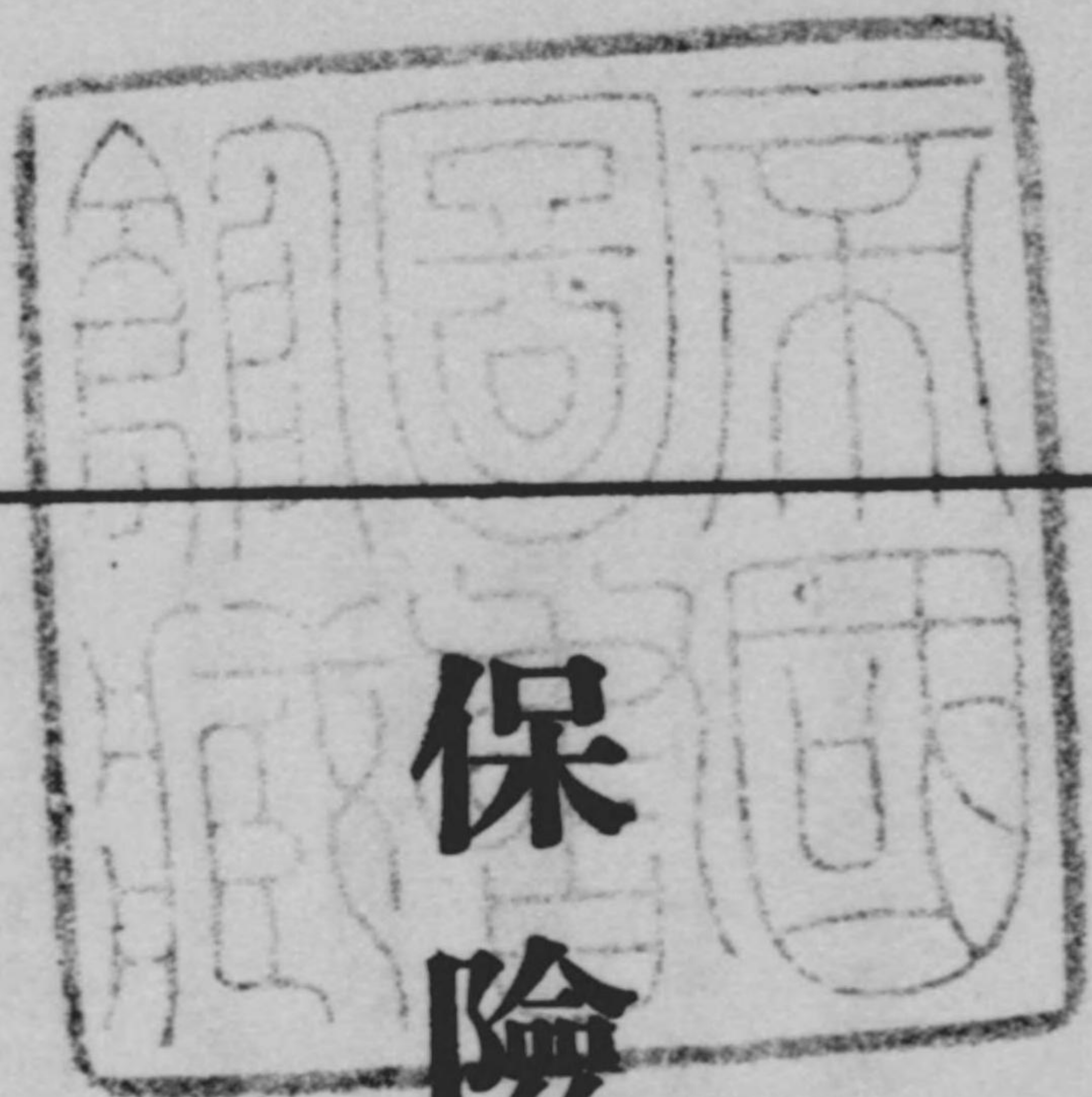
この著作物は、著作権者不明のため、著作権
第67条の規定に基づき、平成12年3月
けで文化庁長官の裁定を受け使用するもの

323
211

保險國人記

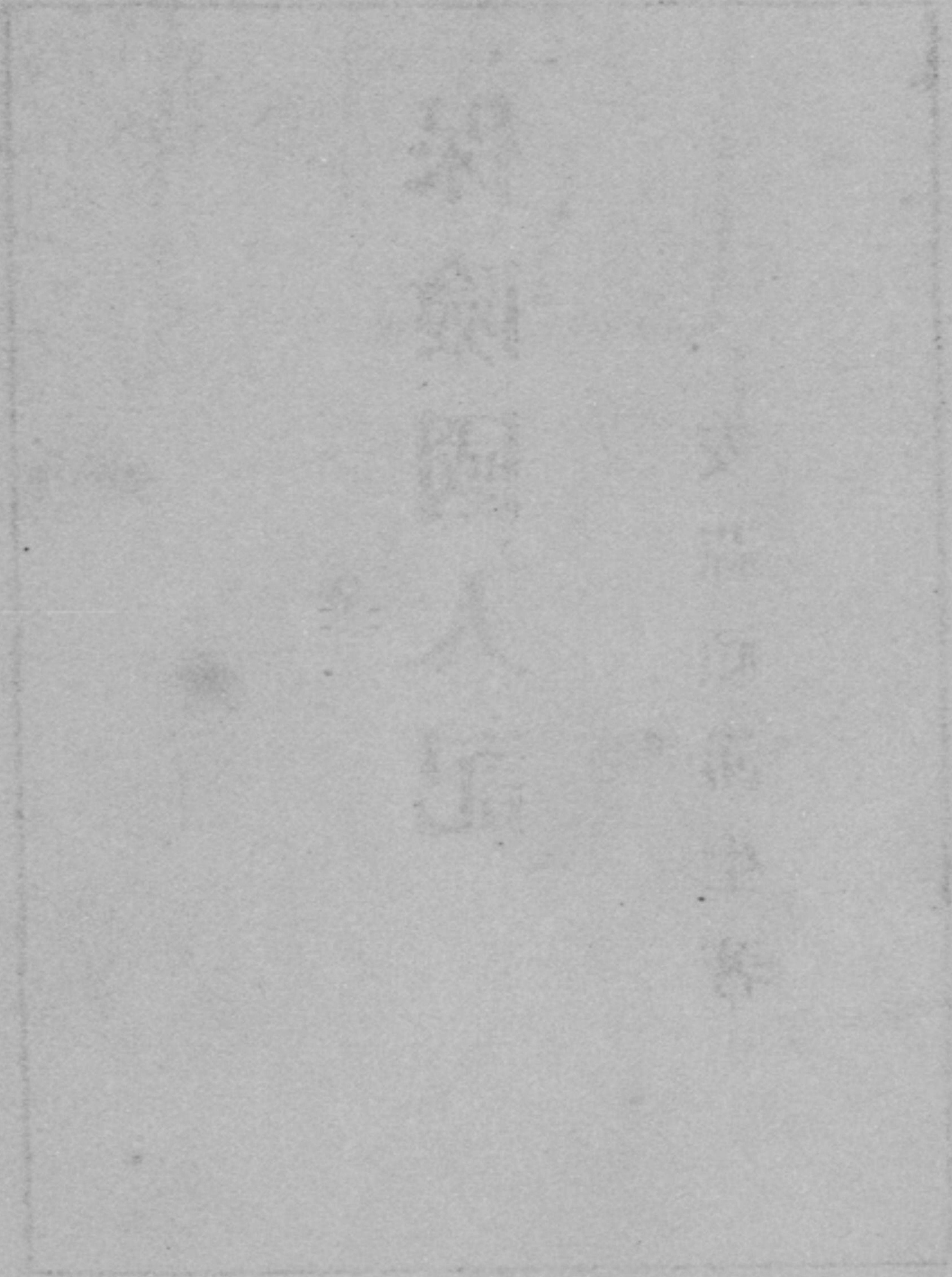
432

特231
450



保險國人記

—安蒜頑涕生著—



和蘭國入道

序

本書の著者

頑涕安藤政治郎君は、予が貳拾年來の舊知である。曾て會社員たるに見切りを付け、今や堂々たる筆政の人士である。

頑涕安藤政治郎君は、去月末迄「保險銀行通信主幹」として、其透徹せる觀察と、輕快なる麗筆とに依り、斯界の一角、雲湧き風生する處、宛然魚鱗の狀を示すもの、正に五ヶ年であつた。

頑涕安藤政治郎君は、戰機漸く熟せんとするを見たものか、諸般の計劃を立て、爰に保險興信社を創設した。

頑涕安藤政治郎君は、其創設せる保險興信社の處女出版として、「保險國人

記」を刊行し、以て社會に問ふべく、予に序文を求められた。

「保險國人記」は、過去五年間に涉り、保險銀行通信誌上に連載したる君が、努力の結晶である。君が才筆、君が觀察力、君が機智等々、悉く斯一卷に收蔵されてあるは勿論、君が面目、亦實に躍如たるを見る。

「保險國人記」は、本邦保險界の明星、巨頭を初め、苟も異彩あるものは、其社長重役たると、無名氏たるとを問はず、殆ど之を網羅して、其數壹佰に及ぶ。以て斯界の消息を窺ふべく、又以て後進の、師友たり得るを疑はない。若夫れ本書に於て、未だ多少の盡さざるものありとせば、そは「續保險國人記」「續々保險國人記」の刊行に依つて補足さるべく、頑涕安壽君の麗筆、才筆、健筆は更に其透徹せる觀察と、其不撓不屈の努力と相俟つて、必ずや完成さるべきを確信する。

敢て一言して序文に代へ、其責を塞ぐ。

端午の月拾九日

「保險銀行通信」編輯室にて

望天樓主人 水上熊吉

はしがり

▲人を月旦するに、大約三種の様式がある。評傳體は、問題の人物に對して、遺憾なく之を批判し得るだけの、明と智とがなくてはならぬ。實叙體は、史學的研究を根據として、所説の實證と、事實を事實ならしむる觀念的描寫から、更に一步進んで、自然的描寫がなくてはならぬ。物語體は、その材料と修辭とを、巧みに取入れて、讀者の感興を惹かなくてはならぬ。是等一切の定石を無視して、滅茶苦茶に書き換つたのが、此保險國人配であります。

▲實を謂へば、保險國人記は、書くのが目的で無かつた。私の自省資料としての、人物行脚が眼目であり、人間見物が主眼であつた。而して此職業記録とか、生活記録とか稱し得べき保險國人記が、自然に生れ出したのであります。

▲事物の裏面を觀て、その缺陷を許くを極端に避け、殊に活字に組んで世に公表するため

には、暗黒の方面を全く度外に措かんと努めたのが、一貫した私の方針であつた。従て「頗る甘えもんだ」といふ非難があれば、それは我が性を矯め、我が癖を正して書いた此の保険國人記の、寧ろ成功だと、自負したのであります。

▲茲に收むる保険國の人たるや、必ずしも特定會社代表者の謂ひでない。地位に關せず資格に關せず、成るべく特徴ある題材者を選んだ。だが、K生命の給仕君の、東京市から孝子として表彰されたるを書かんとし、却て本人の前途を過たしむるなきかと、同社幹部の忠言に基いて止めたる如き、又は、M火災の小使君の、恒産ありて恒心の敬すべきを書かんとし、却て其妻女から、泪を以て遮られて止めたる如き、又は、Y生命社長の十數回目の訪問に、漸く面會を遂げて書き上げた原稿を、庶務課長君の不注意から紛失し去られて、それで氣を腐らして止めたる如き、なほ此書に錄せざる多き話材の残れるは、申すまでもありません。

▲訪問記者としての悩みは、相手方から居留守を使はれたり、素氣なく追ひ拂はれたりする事で、殊に取次の人々から、慳貪無愛想に應對されるほど、悲觀に値するはない。されば意外に手つ取り早く、無雜作に材料の獲られたほど、滿悦に耐えぬ時はない、兎も角書き上ぐるよりも、目指す人に逢ひ得る事のそれが、重大なる努力であつたを、泌々考へさせられるのであります。

▲附録に採録した「年齢三十七歳」は、保険銀行通信社に入る以前に、六尺子の「保険及信託」誌上に發表したるもの、「愚につく嘶」は、保険銀行通信社に入る匂々發表したるもの、何れも當時に於ける私の、偽らざる告白であり、欺かざる感想であります。

▲此たび、私の創始したる保険興信社の前途を祝し、特にこの書の刊行に對して、序文を寄せられた保険銀行通信社主水上老の厚意には、衷心感激の情を禁じ得ません。

保険操觚界の後進

安 蒜 頑 涕 生

昭和四年五月念一

目次

保險國人記

- 一、その一黨に揺り動かさるゝ中村文四郎氏……………一
- 二、悠々俳三昧に生きる齋藤富次氏……………四
- 三、五分間以上は悲觀せぬ關伊右衛門氏……………八
- 四、童貞其ものゝ如き百束於菟雄氏……………二二
- 五、保險界に見切りをつけた原島茂氏……………二五
- 六、汽車と宿屋とに生活する石黒勇次郎氏……………一九
- 七、子供部屋に引籠る波多野春房氏……………二三
- 八、外國會社を驅逐した志田鉦太郎氏……………二六
- 九、一管の筆で重役を贏ち得た岩間六郎氏……………三〇

一〇、重役の悲哀を物語る鴻田秀一氏……………	三〇
一一、山岳讚美から保険に志した河野九峰氏……………	三六
一二、其氣宇の尋常ならざる久保義美氏……………	四二
一三、生保協會理事長を辭する矢野恒太氏……………	四七
一四、議政壇上に氣を吐く金光庸夫氏……………	五三
一五、社會劇「雪を凌ぎて」の作者池田龍一氏……………	五九
一六、商業學校長の經歷を有つ小比加秀一氏……………	六五
一七、萬卷の書籍を讀破する寺田四郎氏……………	七一
一八、馬上に豪快の氣を吐く尾崎庄兵衛氏……………	七七
一九、沖繩縣唯一出身者の仲宗根玄愷氏……………	八三
二〇、一見茫洋乎たる異材下田寛治氏……………	八九
二一、保險事務家で博士となつた三浦義道氏……………	九五
二二、食料新味に精進する山田元之助氏……………	一〇一

二三、愛見の早逝に涙を隠した清水文之輔氏……………	一〇七
二四、空々寂々を自稱する田中重藏氏……………	一一三
二五、當代の世相に超越する岡安理平氏……………	一二〇
二六、折花攀柳の趣味を解せぬ原邦造氏……………	一二六
二七、大自然と同化した全靈の尾崎秀雄氏……………	一三二
二八、保險政策より臺灣統治を見る益子逞輔氏……………	一三八
二九、役人生活廿年の經歷を有つ塚本明籌氏……………	一四四
三〇、日本山岳會の先覺者河合良成氏……………	一五〇
三一、夫子獨自の信條に終始する石坂泰三氏……………	一五六
三二、失意裡に晩年の幕を閉じた田中小太郎氏……………	一六二
三三、五十餘の公職肩書を有つ神田鑑藏氏……………	一六八
三四、勞働重役を以て自ら任ずる木村雄次氏……………	一七四
三五、律義主義を以て邁進する橋本萬右衛門氏……………	一八〇

三六、義務觀念に生きんとする久保山武雄氏……………一三三

三七、人間美を發揮する國務大臣藤澤義之輔氏……………一三四

三八、至誠一貫を以て信條とする長松篤樂氏……………一三五

三九、郵便配達夫たらんと志した山下恒雄氏……………一三六

四〇、メーアチャンスと一笑する惣崎貞夫氏……………一三七

四一、努力と誠意とを標榜する片倉脩一氏……………一三八

四二、幼時のやんちやんを物語る安田善五郎氏……………一三九

四三、ガーデンホームに心血を凝ぐ今泉丈吉氏……………一四〇

四四、三夫妻團圓の家庭を楽しむ竹友安治郎氏……………一四一

四五、自己一代主義なりし名取夏司氏……………一四二

四六、京都市政を取り裁いた川村鋤次郎氏……………一四三

四七、事業と人物の哲理を説く富永義孝氏……………一四四

四八、その夫人を大震災で喪つた藤田藤氏……………一四五

四九、腰辨十年の苦節を忍んだ渡邊喜徳氏……………一四六

五〇、人生のプログラムを作る大西竹二郎氏……………一四七

五一、學生時代に逸話を貽せる佐藤重遠氏……………一四八

五二、巨人頭山滿翁を知己に有つ鬼木宗太郎氏……………一四九

五三、不得要領裡に要領悟了の吉澤銚三郎氏……………一五〇

五四、勸誘事務の陣頭に馬を進むる野依辰治氏……………一五一

五五、海軍少主計を志願した黒田馨介氏……………一五二

五六、電氣製鐵に先鞭をつけた岩川與助氏……………一五三

五七、絶對に訓示演説をやらぬ清水景吉氏……………一五四

五八、無味無臭水の如しと稱する中松眞郷氏……………一五五

五九、愛硯の趣味に没る原田駒之助氏……………一五六

六〇、神氣の轉換を説く鈴木太郎氏……………一五七

六一、恵まれたる家庭愛に没る上村敦術氏……………一五八

六二、年收七千圓の女流闘士川上千鶴子氏……………二二五

六三、有爲轉變を如實に物語る田中四郎左衛門氏……………二一九

六四、日本一女流闘士の稱ある溝口七子氏……………二三三

六五、水上瀧太郎の文名を馳せる阿部章藏氏……………二二六

六六、闘將として世界的レコード保持者渡幸吉氏……………二四〇

六七、世界的保險醫學者の名譽ある高田他家雄氏……………二四四

六八、二千個の酒盃を蒐集した岡本治彌太氏……………二四七

六九、長日月三十九個年動續の城谷忠三郎氏……………二五二

七〇、「味覺極樂」に聲名を馳せた大村正夫氏……………二五四

七一、釣魚哲學に人生を樂しむ飯島賢吉氏……………二五八

七十二、七千の女性を前に演壇に立つた曄道文藝氏……………二六二

七三、契約者の公僕を以て任ずる前田利定氏……………二六五

七四、起つて會社の立場を擁護する瀨尾時憲氏……………二六九

七五、縣知事の官歴を搔なぐり棄てた佐々木秀司氏……………二七三

七六、ランニング選手の名を馳せた石井徹氏……………二七六

七七、無藝の小食家を以て任ずる山田敬亮氏……………二八〇

七八、衝動哲學に學境を發見した細貝正邦氏……………二八四

七九、保險高等專攻學校を開設した栗津清亮氏……………二八七

八〇、独自の經濟眼に保險學を説く米谷隆三氏……………二九一

八一、樂天的生活に終始する玉崎隆三氏……………二九四

八二、本來の無一物を標榜する西原連三氏……………二九八

八三、一週日を不眠不休で通した上山英吉氏……………三〇一

八四、英國式紳士といふ言葉を嫌ふ柳谷巳之吉氏……………三〇四

八五、身長五尺九寸七分を有する横田瀧三郎氏……………三〇八

八六、料率協定に功績を發揮した菅田英久氏……………三三二

八七、大努力主義を玉條とする武末祐三郎氏……………三三五

八八、スポーツ受難に半生を過ごした峯豊氏……………三三九

八九、清談涼話に酔懷を行る田村幸策氏……………三三三

九〇、親に仕へて至孝の評高き土井正司氏……………三三五

九一、何養ツ主義を鼓吹する高橋彌太郎氏……………三三九

九二、「豫定海上保険論」の著ある石田祐六氏……………三三一

九三、國賓殿下の通譯を承はつた本田竹治氏……………三三五

九四、自動車保険を開設した高島久雄氏……………三三九

九五、自動車で保険を募集する福澤政次郎氏……………三四二

九六、浪人聯盟を創する久保村憲介氏……………三四六

九七、外務員から常務となれる吉田義輝氏……………三五〇

九八、大禮参列に感激する園田榮五郎氏……………三五三

九九、學歴超越で博士となれる龜田豊治朗氏……………三五六

一〇〇、貧乏哲理禮讃に微笑む小山哲四郎氏……………三六〇

附 録

年 齡 三 十 七 歲

諦 悟 哲 學……………三六七

生 死 感……………三七二

機 牲 誌……………三七六

女 雜 観……………三六二

下 獄 記……………三六八

後 妻 論……………三九五

愚 に つ く 噺

女 房 哲 學……………四〇三

當 世 泥 棒 氣 質……………四〇七

誠首物語.....四二
 天賦定量説.....四二五
 回顧十八年.....四九
 媒酌制度.....四四
 貞操問題.....四七
 テーノ口禮讚.....四〇
 親莫迦茶ン倫.....四三

一、その一黨に揺り動かさるゝ中村文四郎氏

藤條の秋雨

秋雨そほ降る一日、私は本郷丸山新町に中村さんを訪れました。

大正十四年八月某日、保険界の一角共済生命に稀有の大紛擾事件勃發し、同業操觚者諸君は日に夜を繼いで東西に自動車を飛ばし、都下の日刊新聞干渉者も、富豪安田家を背景とせる珍種子として、可なりの緊張振りを見せたのだ。私は其當時、断出しの新参者であり、別に期する所もあつたため、編輯室裡、他の仕事に没頭して一向此事件とかけ離れ、觀望して居たのであつた。私は過去十八年の實歴に鑑みて、轉た俸給生活者に淡き哀愁を唆られ、筆の商賈を別にした一個の私として、中村さんの感想を叩いて見たい、と考へて居たのでありました。

事件の發生

事件發生後二ヶ月、日刊新聞の之を筆にするもの更になく、保険關係の通信雜誌も、開れから開れへと新らしい日を送り迎へて、上野竹之臺寓亭に立て籠る共済生命元社員諸君の存在をも忘れ勝ちの今日、雨の半日を私のために對座して呉れた中村さんは、他に客來もなく、純眞の心をその儘、諄々と説いて倦まないものでありました。

辭職社員の七十名は、何をなしつゝある歟、共済生命に新職制布かれて、全く無用に歸し去つたあの人々は、果して何の目的を抱いて對抗しつゝある歟、而して奮然辭職して、安田園外に起ちたるあの人々は、結局將來どうなり行くのだらう歟とは、われ人共に知りたいたいと欲する事實である。或る人達が、共済生命辭職組の策謀を誤り、荏苒日を過ごしつゝあるを嘆つたといふを聞いた。又或る方面では、共済の辭職社員中、信念の力強き意氣溼刺の連中を引き抜いて自社に招聘せんと、傲語した幹部者あるをも耳にしたのだ。一定の扶持に離れて、家族米鹽の料にも困る人があるだらうにと、聳感した苦勞性の人の嘆聲をも、傳へ聞いたのでありました。

然し泪ぐましく感激に満ちた中村さんの話によつて、現代の浮薄小惻巧に立ち廻る世相に、一服の清涼劑を投ずる感を以て、中村さんの告白に私は、傾聴させられたのであります。

後進の決議

「正しき道を正しく歩みます。其他は一切合切、我々の行動に干渉されては困ります。我々が如何なる手段を以て、如何なる目的に歩みを運ぶかは不問に附して頂きたい。之を發表すれば、あなたとして當然意見を出すだらうし、異見が出れば、我々の決議遂行に支障を來します。」と謂ひ渡された中村さんは、總てを擧げて其一黨の平一員となり了し、萬事は同志の決議に基づきて進退する一個の、好々爺に過ぎないのである。そして専念謹慎閉門してゐる現在でありました。

中村さんは、曾て共済生命を退く時、二十年來一緒に仕事して來た僚友と相訣るゝ際、「ある信念の下に當社を去る自分は、今後或は妻子と路頭に迷ふ事があるかも知れない、

その時は、中村を恐れむよりも、益々信念に生きる中村を褒めて貰ひたい」と謂つた中村さんであつたのだ。共済生命に東京支店長よりも百圓安い給料に甘んじて、支配人の要職を以て、敢て安田家従業人に對して、犠牲に始終任じた中村さんであつたのだ。それが徒黨を組んで陰謀を企つるといふ嫌疑に因て誅られ、其後を追つた後進同志の決議に、瞑目拱手して身を委ねて居る中村さんであつたのだ。果して篤亭七十名の健兒は、何物をわれ等の眼前に、展開し來るであらう歟。辭して門外に出づれば、又も降り來る秋雨が、淋しく私の頬を打つのであります。

追記 中村さんは、其後大安生命に聘せられ、現に同社の取締役兼支配人の榮耀にあります。

二、悠々俳三昧に生きる齋藤富次氏

門外の一步

門を出づれば、自転車が來る荷車が來る、自動車電車に注意を怠つては一步も進むこと

が出来ない。終日孜孜仕事にいそしむ外に、出勤の途上朝夕二回、この眼まぐるしき世態に直面する。さらぬだに一葉の新聞紙によつて、遠く千里の新事實を朝餉の前に、床中の一瞬に詳知し、無線の電話機によつて數十里外、遠方未知の人から肉聲を聴取する現代にあつては、各人の神経は、眞に錐の尖端の如く細く鋭く、自ら尖らざるを得ないのであります。

この外界の事物により敏感になつた神経を、癒やすに二つの方法がある。其一つは更に進んだ形式の刺戟を求めて、現在の刺戟を鈍く感ずる修養で、活動寫眞の繁昌は其證據である。殊に連續探偵劇の葛藤などが、喝采を博する所以は之に存する。甚だしきは一女優が、アトランチック、シチー十七階建の頂上に、一本足でダンスの一幕を演じ、流石のチャキラーをして、膽を寒からしめたといふ最近の實例さへもあります。

他の一つの方法は、精神的に現代を超越して、尖り勝ちの神経を鎮めて、客觀的に自己を發見する事であります。

禪味と俳味

政界の高橋是清、野田卯太郎二老から、禪味と俳味とを奪ひ去れば、われ等と大差のない平凡人と化し去るであらう。齊藤さんは共保生命の庶務課長で、和歌の雅號を重俊と云ひ、詩文俳句の雅號を松韻と云ふ詩人であるのだが、「繪畫音曲、殊に淨瑠璃もやり茶の湯活花、圍碁、將棋何でもござれでやりましたが、一向淺いものですから、これと云ふ一つも得意のものはなく、誠にお耻づかしい事でございます」と謙遜して居るが、鳥根の長濱に生れた關係から、日本海の荒浪で練え上げた腕前は、曾て江東竹屋の渡しで櫓を漕いで見せ、船頭連を三嘆せしめた事があり、三四年前湘南の海に游泳し、此人に従いて沖迄泳いだは、たつた一人の青年に過ぎず、其處に居た土地の若者共も、顔を見合はして感心したといふ。これが文久三年生れの老人と想はれない元氣だつた相である。齊藤さんは三島中洲先生の二松學舎に學んだが、儒教を以て過激思想を防壓し、國民道德を健全にするを旨とする帝大内の斯文會に、今日でも毎週一回は出席して、聽講して居のであつた。此人

の六代前に當る祖先は、寶井其角の高弟風雲齋に學んだ俳人で、寶曆年間千句寄せの選者となり「飛ぶ鳥も身を細めけり糸櫻」といふ名吟を遺した仁であります。

雲水の一喝

齊藤さんの近什は、社員諸君と函嶺清遊の砌、左の十句があります。

横濱や蟹行くむかし秋の風
我秋と誇り顔なる群雀
眞帆片帆秋を初音の濱千鳥
雲の帯解けて素肌や秋の富士
小田原の音語るや秋の夜半
水を琴秋鯛うたふ宮の下
雲水の一喝高し秋の山
倒さまに蘆の鏡や秋の不二

蜻蛉の音に關址 偲ぶ杉並木
秋風に靡く 強羅や萩の花

句が月並だらうが平凡だらうが、其れは問題にはならない。近くボストン大學を卒る一人ッ兒重雄君の歸朝を待つ樂しみが、其眉宇に溢れて居るのでした。

追記 齊藤さんは、其後社外に身を措き、悠々自適の境涯に入りました。

三、五分間以上は悲觀せぬ關伊右衛門氏

内憂と外患

創立十二年目とある三月、保險契約高は二億萬圓に上り、更にそれから六ヶ月を経た九月末に於ては、その契約高三億圓に達成し、來年度は尙進んで、年額三億圓の増加豫算を以てする。此順に進んで行つたら果してどの位まで發展するのぞか。外に斯界の注目を一身に集め、内に社長の信望を絶對双肩に擔ふ其八千代生命常務の關さんも、同社に入つて十

年、當時一緒に卓を並べた同僚は、一人殆れ二人退き、當年の人で今残るは、僅々四五名を出でない。其十年前を顧みては、追に感慨に耐えないだらうと思はれる。關さんは、入社の際月俸百圓で、三四年間は其儘に据え置かれ、入社の際年福岡支店長となつて、そこで三ヶ年を過ごしました。

其頃の關さんは、最も厳しい試験時代にあつて、支店發展の苦心の外に、本店及支店の一部から或はボイコットが行はれ、或は流言蜚語が行はれて、是等の迫害に因る内憂外患交々到る有様で、毎日涙の出るやうな苦悶を嘗めた相です。

殊に當時の保險従業者は、金錢に關して頗る不信用で、各支店を通じて敢て珍らしい事件でもなかつたが、福岡支店の會計係で、本社の金を一千餘圓費消した者があり、之を社長に報告して、敢て負擔の責任を輕くせん、としないのが此人の眞骨頭でありました。

月賦の借財

百圓の月俸中生活費として三十圓を除き、残りの七十圓を會社に返還して、それを出張

の旅費ともし交際の費用ともし、支店の裏二階六疊と三疊の居室に家族と俱に住み、極度に諸費用を切詰めて見たが、三十圓の生活費では奈何ともし難く、遂に部下千圓の費消金のために、わざ／＼親戚から借財して之を會社に辨償し、其借財は二ヶ年半に亘つて、漸く月賦で償還し得たが、之は放蕩のため社金を費消したのだ、と同僚から中傷されて、其間平然泰然晏然たる所に、躍如たる此人の面目を窺ひ得るのでありました。

關さんは、神戸の高商卒業後、一たび明治生命に入つたが、人を信ずることの出来なかつた遠る瀬なさは、遂に八千代に走つて、其會社の空氣と其社長の意氣とに渾然融合一致し、眞に其所と時とを得て、今日を築き上げたとされます。

自己の耻辱

不遇や不平を洩らし、或は上司を呪ふやうな人は、團體生活の終りを完うし得ない。團體生活にあつては、其中心人物を深く信ずると共に、同じ團體員に對して、常に強者を以て任じなければならぬ。自分が其團體員なるが故に、他の團體員から恵まれるを欲する

が如きは、實に其人の恥辱である。自己の職責を完くした上に、尙ほ餘裕を以て、他の不足を補ふのでなければならぬ。人を呪ひ延いて其團體を咀ふが如きは、畢竟弱者に終らざるを得ない。人を責めずして人を憐れむ者は、常に強者の地位を占むるのであつて、その人々各個が、凡て此意味の強者となり一致團結する時んば、乃ち其團體は盛めて發展隆昌を期し得るのであるといふのが、關さんの主義であり主張であり、而して堅き信念でありました。

事業の上から私行の點から、有らゆる非難攻撃譏誣中傷があつても、常に五分間以上は、之に悲觀の時を許さないといふ此人が、十月廿四日の夜は全國代理店評議員の外、官達や學者其他二百數十名を招待した三億萬圓達成祝賀會場の歌舞伎座に於て、煌々たるシヤンデリヤの下、會心の微笑を洩らす其半面を、私は見逃す事は出来ません。

追記 關さんは其後、八千代生命と關係を絶ち、「使はれ人の嘆き」を公にするのでありました。

四、童貞其ものゝ如き百東^{ヒヤクツク}於克雄氏

一種のカビ

偉らそうな人間の社會も、宇宙の極大から遠觀すれば、太陽系の一衛星の渺たる地球上に、こびり付く一種のカビに過ぎない。飛行機が飛んでも飛行船が動いても、結局地球の圏外に出ることは出来ない。雨が降り過ぎれば人間の集が浮き出し、雪が降つたといつては汽車が止り、風が吹いたとあつては電信電話が不通となる。若し夫れ科學の進歩を極端に應用して見ても、人間の命を無限に延ばす譯には行かず、假りに人間の命を不老不死にまで取止め得たとした處で、何十萬年の後には、確實に地球が冷却して、自然に其面積上のカビも消滅し去るとすれば、位人臣を極めても畢竟カビの境涯を脱せず、爵位がどうか位階がどうかいふことを、マルで勅定の中に入れない程までに行かずとも、カビはカビなりに名譽を欲し、地位を望むのが一般人間の素根性であります。

人間の本然

カビはカビ相當に、人間本然の天命に安んじて、無理なことをせず非道なことをせず、悠々として人間の正しき道を歩むのが、開れがわれ等の理想でなければなりません。

百東さんは、日清生命庶務課の助役に過ぎない。一方に早稻田實業學校の夜學の講師を兼ねて居るのだが、これも大した問題ではあるまい。庶務課の一助役たる肩書を除いても百東さんの値打に何の関係はなく、私立學校の夜學の先生といふ職務を取り去つても、百東さんの眞價に何等毫末の影響のない點に、やがて此人の人格の閃きがあります。

「餘程立派な家庭に育つたに違ひない」とは、百東さんを知る人々の、衆口一致の批評である。童貞其ものゝ如き風采を以て、年齒尙弱きに拘らず、誠に能く行き届いて、而して其間一點吹々の、文人肌の意氣を有する人格者であるが、名聞を欲せず利達を好まず、それで徳厚家を銜ふにあらず、才子風を氣取るにあらず、眞に圓熟したる玲瓏透徹の士であります。

士族の商法

奇人外骨翁の舊聞雜記中に、「伊庭想太郎の長成社」と題して、左の如き記事がある。明治三十四年六月二十一日、東京市参事會室で當時の奸傑星亨を手際よく暗殺した伊庭想太郎、此人が他の刺客の如く恒産なき壯士體の者でなかつた事は知つて居るが、曾て提灯製造所の社主であつたことは知らなんだ。明治十五年九月二十二日發行の「有喜世新聞」に左の廣告文が出て居る。

今回製紙及提燈製造兩工場共更に規模を擴張し職工を増募し廣く内外諸君の御需用に應じ候間陸續御注文希望仕候

但製紙の備者虫害除けの白紙岳雲紙及壁紙用大高其他諸紙提燈は白張繪附は勿論道具一切製造致候事

明治十五年九月

東京市麴町區下二番町七十一番地

長成社

社

主 伊庭想太郎

頭取 柴原武雄

幹事 百束半六郎

追寄製紙御用の方は小石川區武島區二十一番地製紙場へ向け直ちに御照會あるべし

この廣告文中の百束半六郎といふのが、即ち百束さんの嚴父であつて、寛政三劔士と呼ばれた伊庭軍兵衛の末孫たる伊庭想太郎と一緒に、士族の商法を營んだのが、此廣告であります。

流麗の筆致

長生社とは肥前唐津藩の藩主、現子爵小笠原長生氏の名前から來たもので、此製紙工場から出來たのは、現にある「江戸川」といふ巻紙がそれだが、伊庭想太郎は長生子爵の養育主任であり、百束さんの嚴父は子爵の學友であつて、唐津藩の英學塾では天野爲之博士と同學で、高橋是清子から英語を教へられたさうです。

文才家として百束さんの流麗な筆致は、保険界稀に見る光彩で、之は單に日清生命のみの矜りではありません。

五、保険界に見切りをつけた原島茂氏

見限りをつけて保険界を退いた原島さんは、現に同業六尺子の「保険會社社員録」を見て、何れの會社にも其氏名を発見する事は出来ないが、實は八千代生命及帝國火災の保險專修學校の講師として、依然保險國の人であるに變りはありません。

今より十五年前、第一生命の秘書たりし原島さんは、其學殖識見共に斯界の第一人者として、而して矢野社長の智囊者としたの名聲が、當時の業界に響き渡つたのであります。其頃存在した博愛生命に、内務部長となつて第一生命を飛び出したのは、頓て後の半生を多岐ならしめ、更に自ら好んで流離顛沛の渦中に落ち込む原因を作つた。私が原島さんと相識つたのは其前後で、支那老帝國にも似たらん如き内亂紛争の、陰險邪智端倪すべからざる博愛生命に於ては、理路透徹機鋒峻敏の此人の内務部長振りは、却て重役幹部者から煙たがられた結果、約一歳そこくで老廢の同社を見捨て、出て行かねばならなくなつた。その重役幹部者の奸曲誑詐の情報を耳にして、「保險界のジゴマを仆せ」と云つて起

つたのは、鴻田氏や水上老や、私達を一團とする新界浪人組の據頭でありました。

浪人の奮起

浪人團の目的は、「秀才原島を犬死させるな」といふことであつて、鴻田氏などが積雪を踏んで、第一生命時代原島さんの、上海行の跡始末問題から引き續いて、此ジゴマ討伐のため敢て力を致したことは、當時の高歳生命のストープの赤い火と共に、今に尙其光景は私の忘れ得ない所であります。

「大會社たらんよりも良會社たれ」といふ理想を抱く第一生命を出でた此人は、仙臺に東華生命の支配人として下向したが、此處でも理想の天地は見出されず、仕事に悶々の志を抱いた結果は、随分荒んだ酒の生活に這入つた様に傳へ聞いて居ります。

海上保險の權威者村瀬博士の媒酌に依つて迎へた連子夫人が、二兒を残して仙臺で逝つたのを機會に保險界に念を断ち、今や一學究として専心早稻田大學商科の講師として、育英の方面に努むることになつたのは、同人間に寧ろ意外とされる事象でなければなりません。

油虫の生活

晩秋の雨が音もなく静に降りそぐ一夜、私は汽車の時を待つ間を、須田町邊のある繩暖簾を潜つた卓上の徳利に親しみながら、泌々原島さんの當年を想ひ起すのでありました。原島さんが見向きもせずに出で去つた博愛生命に、私は其後一ヶ年半程ころがり込んで重役の許した香氣と我儘な振舞をして退けた。原島さんが紙商を初めるとか石炭屋になるとか噂された迹を追つて、私は興信所を引受けたり金貸會社に奉公して見たりした。細君會を拵へて自分達の環境に泣き笑ひしながら、相往返した連子夫人は世を去り、私の妻も亦、二兒を残して其前年死没し去つた。

原島さんが講堂で、蘊蓄の學理を説く現況を更に追つた形で、私は鉛筆を嘗め乍ら油虫の生活に這入つて居る。原島さんを考へれば、身につまされた過去の事歴に、泪ぐましき思ひ出が油然と湧いて来る。が人生の旅行は、三等列車で足腰も踏み延ばされずに、壽司

詰めされた窮屈よりも、時には汽車賃足らずの膝栗毛、名もなき川を眺め山を賞で、木賃宿の煎餅布團に南京虫に啖はれて惱まざる、裡にも、觀じ來れば、一抹の哲理がないことありませんでした。

六、汽車と宿屋とに生活する石黒勇次郎氏

生活の安定

火災保険界の闘士には、彪大なる顧客を抱擁する者が尠くない。生命保険にあつては、毎月々々其實績を鞭打たれ、偶々優秀の數字を擧げ得ても、連月米鹽の料に追はれて、却て生活の安定がない。久しきに亘つて同一の會社に勤めて居ても、活動が鈍つて實績が擧らねば、意氣頓に銷沈して昔日の俵を止めず、他に轉職して無理な生活裡に入るにあらざれば、陋巷に妻子と貧に泣く者が珍らしくありません。

火災保険の仕組は、繼續契約の場合にも、収入保険料の何割かが貰へるのだから、年一

年と顧客が増して、繼續の都度収入が殖えて、こゝに生活の安定があり活動に興味があり遂に事業と終始することゝなるのであります。

石黒さんは、火災保険の仲介業に指を染めて二十五年、文字通りの奮闘努力は、六年前大阪に支店を設け、其前年名古屋に、近年は福岡に迄出張所を開いて、關東方面では醸造家に関西方面では紡績業者に、偉大なる顧客の信用を博して居ります。

年 收 十 五 萬

獨力二億萬圓の取扱契約高を保持して居るから、普通物件と工場物件の割合が甚麼程度か詳密に判明しなくも、假りに一千圓の契約高に對して、平均五圓の保険料とするなら、年收百萬圓の保険料が這入るのであり、之に對して一割五分の取扱手数料を獲得するなら年額十五萬圓の實收があるので、石黒保険部の部員は、工學専門の技術士を初め五十餘名が、孜孜として奮闘して居ります。

工學専門の技術士といふのは、普通の會社外務社員が手鞆を提けて、契約の満期日頃に

繼續の勧誘に出かけるのと違つて、平素に於て自己の顧客たる否とに關せず、工場の視察調査を萬遍なく行ひ、單に保険事務ばかりでなく、防火設備から工場諸般の施設に厚意の助言を怠らない。といふ遣り方で、此苦心と努力とは、頓て先方の好感と敬意とを贏ち得て、保険料割引杯いふ陋劣手段を超越して、グングン得意が殖え、取扱契約高が増して行くのであります。

定 宿 の 帳 簿

子孫のために美田を買はず、眞に身も心も保険仲介業のために打ち込んで、常に汽車と宿屋を生活の本據と定めて南船北馬、濱松に行けば濱松の定宿に、錠前のついた書類と帳簿があり、高崎に行けば高崎の定宿に、必要の事務書類が預けてあるといふ調子で、かくして東京海上、日本海上、神戸海上、三菱、明治、東京、共同、帝國各火災保険を初め、内外諸會社との取引關係は、各支店を合して五十以上を算するのであります。

娛 樂 と 職 業

意義ある仲介業者としての石黒さんの畫策は、飽くまで技術的に飽くまで科學的に仕事をすることであり、保險業を以て一生を終るといふ覺悟で進みつゝある。曾て蠟殼町の事務所から、あの大地震の時に持ち出した保險の重要書類とカード類を、船積みにして日比谷方面に避難の途中、有樂橋附近の四邊全く灰燼に歸したる中に、單り安全なるを得たるは、主人公の平素信ずる金光さまの御加護だと謂ふが、實は此時の船頭の努力と、石黒さんの心を心として、死守した店員達の功績は、洵に天祐を克ち得たものでありました。石黒さんには家憲があつて、其中に左の文字が讀まれます。

(精神) 人其當然の職分を盡して成敗に心を勞する勿れ、條理の示す處に隨ひて其結果を天に一任せば、則ち煩悶の憂なからん。

(資本) 誠意、努力。

(方針) 抽斗の中に、勝のよつた紙があれば末と思へ。

人間は、娛樂なくして生き得られるものでない。又職業なくして生き得られるものでも

ない。其職業と娛樂とが一致する此人は、たしかに世の中の幸福なる一人に違ひありません。

七、子供部屋に引籠る波多野春房氏

災禍の襲來

複雑の上にも、更に複雑を加へんとする現世に於て、紛雜更に紛雜を生まんとする實社會に於て、いつ何時災禍が襲ひ來ぬものでない。注意して道路を歩いて居ても、無鐵砲な自動車をぶつ突けられることもあらう。安心して電車に乗つて居ても、衝突脱線して不意の怪我を被ることもあらう。釋迦や孔子やソクラテースやキリストが、或は磔刑に處せられ、或は毒殺の厄に遭ひ、或は喪家の犬の如く彷徨ひ、或は樹下石上に離苦を積んだ、といふ程の決心まで行かずとも、如何なる突如降つて湧いた出來事のために、思ひ掛けぬ災難が身に罹り來るかも知れない。而かも此種の災厄は、免れんとして免る能はず、避けん

として避くる能はず、そこに眞の厄難の意義があるのであります。

成田の不動

成田の不動尊に、毎年正五九の三回缺かさず護摩を焚いて、訴訟必勝を祈願する辯護士法學士の、法曹界に錚々たる一人者を、私は知友に持つて居る。又、著名なる内科の某醫學博士夫人が、同じく成田不動に月参りして、その連れ添ふ夫博士に誤診なく過失なく、どうぞ商賣繁昌いたしますやうにと、何年となく祈念して居る實例さへも聞いて居る。この超科學的にして超法理的なる點に、人生の旨味があり而かも、人生の恐怖があるのではありますまいか。

大日本火災保險聯合協會書記長波多野さんの先夫人が、文人有島武郎と殉情の事實は、世間に餘りに知れ渡つた事件であつた。「私は、一向他人の出來事の様子に考へます」と今日告白して居る波多野さんも、其當時に於ては、慥に厲九廻し轉輾反側の懊惱と苦楚とを、十二分に飽喫したに違ひないと想ひます。

今年の十月初旬のある夜、波多野さんは宜い気持ちに酔つて家に歸り、すつと書齋に入つて電燈を點じ、赤い傘に映するお伽の國の春の光のやうな流れに浸りながら、ほんやりと藤椅子に腰を下した相だ。すると、讀まうと思つて一冊二冊と買ひ込んで、而かも遂ぞ其目次さへも碌に目を通さずにある百冊以上の書籍のことが、ふと頭に浮んで、「いつ迄も斯廢風にして居ると、老いほれた貉のやうな爺いになるばかりだ」と切ない感じがして來て、此時以來妙にいら／＼する心持ちが起り、何とはなしに落ち付かない気持ちで、一層のこと書物なんぞを、みんな賣つ拂つて了へば、餘つほど氣樂になれるだらう、とさへ思ひつめたのであつた相です。

月兎の所在

せめて此先五年位は、毎夕のんびりした書齋生活をやつて見たいと思ひついた此人は、オフィシアルな會合と自分自身がメンバーになつてゐる一二會同以外には、酒の有無に拘らず日没後の會合といふ會合は、一切御免を蒙るといふことにして、専ら自分のために、

生きて行きたいと發心したとあります。

「死ぬまで心は硬ばらず、飽くまでデリカシーを失ひたくないものと、年をとつて白髪が生えるにせよ、月を眺めて兎の所在に眼を睜つた幼年時の知識慾を、いつまでも失ふまいと念じて居ります」として、二三年前に、子供部屋を彷彿させる書齋を造つたのであります。

安住の墓場

桃太郎の夢を見たり、ロビンフッドと語つたり、或は月の世界に遊び、或はベトベーンの名曲に酔はんとして、永久に子供の心に憧憬れる波多野さんは、其書齋を以てホームとなし、浪風荒き浮世に對する港となし、廣大なる宇宙に對しては自己の天地となし、社會の競存に對しては安らかな墓場ともなす隠れ場所を、そこに發見したのであります。

八、外國會社を驅逐した志田鉀太郎氏

明治卅六年

日露の相戦ふ前、東洋の一貧弱國日本は、外國の輕侮を受くること甚だしく、殊に其當時亞米利加三大會社が、内地の生命保險界を荒らし廻る様は、實に傍若無人を極めた。此現状を默視するに忍びず、敢然として監督官の立場から、外國會社驅逐を計畫したのが、年齒まだ三十代の法學博士、當年の志田さんでありました。

志田さんは、帝大、學習院、及び高商の教授であつて、純然行政官吏となるに慊らず、名義上の保險課長は之を別に置いて、第一世矢野氏、第二世楠氏の後を繼ぎ、第三世の保險課長としての實權を、十二分に發揮したのであります。

供託金制度

外國會社に對して、責任準備金全額の供託命令を發し、保險料として收入した正金を、其儘米本國に持ち去ることを杜絶せしめんとしたのが、志田さんの計畫でありました。

ニューヨーク、ミューチュアル、イクキテーブルの三大會社が、内地生命保險會社を歴

倒して、陰險陋劣の勸誘手段の下に、全國から掻き集むる保険料は、年々百萬圓近くの金額に上ります。

三六

志田さんの此計畫は、小氣味よく成功して、三四千萬圓の契約高を擁して居たに拘らず一昨年新契約を停止したニューヨーク生命を殿りとして、遂に米國會社は、全く内地から其影を没することになつたのであります。

火災保險會社も此發令に基いて、供託金を積むのであるが、損害の方の保険料は其額比較的尠く、殊に業態として外國會社と特殊の關繋あるため、其儘現存してゐるのであつて外國生命保險會社の驅逐は、眞に痛快を叫ばねばなりません。

破竹の意氣

然しながら此志田さんの計畫は、平易に安々と實現し得たのでなく、一たび供託金の發令あるや、外國人の恐慌は其絶頂に達して、主務官廳への陳情や運動は、櫛の齒を引くが如く、物情騒然として、外人に親交ある向々から、時の元老にまで供託制度の撤廢を求め

た。けれども志田さんは、之によつて少しも動ぜず、國威の發揚と國富の増進とを目的として、飽くまで其初一念を貫くに努めました。

當時外國人の觀察は、日露の國交累卵の危きにあるを見て、畢竟日本は、此供託金を以て戦費に資するものだとし、筆に口に之を宣傳して對抗したのであります。

日露の戦端

果然其翌年二月十一日、日本海に於て日露艦艇の火蓋は切られたのであるが、戦へば必ず日本は負けるものと確信する外國人を相手に、米國の資本家の感情を害せず、米國財界の緩和を念とした日本政府は、此供託金問題を志田さんの立案其儘に遂行する能はず、二十萬圓の定額に改訂し了り、之が發表と共に此人は、課長事務の囑托を辭したのであります。

これより先き志田さんは、ニューヨークのアクチュアリー萬國會議に出席して、日本政府の供託金制度の説明をなし、關係三大會社の本店を歴訪して諒解を求め、更に政府の飛

三九

電によつてワシントンに國務卿を訪ね、次長のガーフィールドと握手したのであります。春風秋雨二十年、當年の意氣に衰へざる志田さんの眼光は、炯々として輝いて居るのであります。

九、一管の筆で重役を贏ち得た岩間六郎氏

名古屋城外

愛知縣の津島に生れた岩間さんは、竹馬の友に世界的の詩人野口米次郎氏あり、中學の友に保險界の權威伊藤萬太郎氏あり、高木益太郎、神田鍾藏の二氏等も、亦津島の出身であります。

愛知縣立中學校を優秀の成績で卒業した岩間さんが、名古屋の眞宗生命に入り、眞宗生命が朝日生命と改稱するに及んで京都に行き、楠秀太郎氏の課長時代に、農商務省の保險課に在つて、犀利な手腕を發揮し、認められて帝國生命に樞要な事務に携はる内、惘望さ

れて止むなく國光生命に入り、遂に專務取締役となる今日までの三十年間に於て、その苦心と努力との尋常一様でなかつたことは、謂ふまでもないがそれよりも、此人が現在の地位に漕ぎつけるに見逃す能はざるは、保險に對する不斷の研究と、非凡の觀察とに基く筆の力のそれでありました。

保險の茶話

京都の朝日生命に在つて、保險界の一角から、幼稚な當時の保險事業界を見渡して、心中甚だ慷慨たらざるものありし岩間さんは、遂に斯界の前途に諦めをつけて、外國貿易に志を轉じやうと決心し、友人の紹介を以て濠洲貿易を盛んに營む神戸の某商會に入つて、大海の彼方に渡航しやうと意を決したのであります。

人生は絢へる繩の如しも古いが、岩間さんが當時意の赴くがまゝに、南洋方面に大志を行つたとして、假りに巨富を獲たとしたならば、保險界からは、今日の岩間さんを見出すことは、蓋、出来なかつたでありませう。

志を變へて濠洲貿易に走るとしても、何やら保險事業に對する癩々の餘念があつて、保險界に對する置土産として書いたのが、保險銀行時報誌上蒲軒の名に隠れた「保險茶話」(後に一冊に纏めた「保險漫録」)でありました。

蒲軒の名聲

保險漫録は、朝日生命時代の盛んに各社を研究した結晶の發表で、綠雨式の皮肉もあれば、サツカレー式の諷刺もあり、當時の保險界驚異の的となつた。この反響は却て岩間さん自身が豫期せない所で、其刺激と督勵に感奮して、更に意を翻して保險事業に精進せんと、堅い決心をし直したのである。これが明治三十四年の晩秋、此人二十六歳の時でありました。

少壯論客としての岩間蒲軒の名聲を耳にした當時の楠保險課長は、由來人材招致に熱心で、忽ち岩間さんは、主務省の役人となつたのであります。

監督官廳に席を置く間に、益々精緻な眼界を廣めて、生命保險各會社の實狀研究に至大の便宜を得、帝國生命に招聘さるゝ前後、朝日生命を護國、北海と合併し、大同生命今日の素地を作るに貢献し、太平生命の創業に参劃し、千代田、横濱二社の設計創業に關係したのであります。

家庭の悲運

郷黨に富める親近を有ち、研究の手腕と實力とに因つて、保險界に確乎の地歩を占め得た岩間さんも、過去の家庭は必ずしも恵まれたものではなく、最初の夫人に死別し、二度目の夫人も早逝し、現在の家庭は三度目に娶つた夫人でありました。

幸にして、最初の夫人も再度の夫人も、子女を遺さなかつたので、此環境に有り勝ちな繼子問題の複雑な懊惱に襲はるゝことなく、人生の大風一過、現夫人と琴瑟相和し、一女一男を儲けて和氣霽々の裡に、更に今春一男を得て、其上會社は、契約高一億萬圓を突破すること二十二萬餘圓、眞に健羨すべき現況にあります。

一〇、重役の悲哀を物語る鴻田秀一氏

少数決制度

憲政會が天下を取つたとして、議會に絶対多數を占むる事が出来ないならば、政友本黨の向背は實に大なる問題となる。此場合本黨の少數は、天下の大勢を制することとなり、結果に於ては、多數決制度の常道に反することとなる。世は此内容に就て訝るものなく、此實質に對して怪むものなく、形式の上で多數制であるなら、開れが多數決であると諦むる現狀であります。

實業界に於て立憲的なるべき株式組織の會社であつても、其株の過半を所有する株主人の利害のため、多數株主の得失を閉却される場合が珍らしとしない。殊に従業關係者が此種資本家のために動かさるゝことは、勢の止むを得ざるものとして、殆んど問題とならない程の事實であります。

海賊の志願

鴻田さんは、山口縣萩藩の出、後に家蔵の縣吏たる關係上香川縣に籍を移した。濟々學館を出で、十六歳の時、海軍兵學校に入學を志したが、當時の兵學校は、二十人の採用に對して千五百人の志望者があり、其多數は薩州の出身者及其緣故者で占められたのであります。

陸軍閥の長州出身の鴻田さんが、殊更薩摩隼人に伍して、海軍に身を投ぜんとした處に後年の鴻田さんの面目があるので、當時我國軍艦敵傍が、英國造船所から廻航の途中、印度洋あたりで其姿を消し去り、沈没したのか海賊に奪はれたのか、遂に消息は不明に了つたのに刺戟された鴻田さんが、海軍兵學校に入つて海軍智識を充實し、大洋の眞ツ唯中に海賊生活を送つて安南、緬甸邊を征服し、皇國の版土に之を獻ぜんとしたのであるは、いかにも興味深い一場のロマンスと謂ふべきです。

幸か不幸か、少年鴻田さんの此征服慾は、海軍兵學校入學の關門堅く閉ざされたため、

遂に今日まで實現さるゝに至らず、其まゝ夢のやうに消え失せたのであります。

保 險 の 開 拓

海賊志願に失敗した鴻田さんは、神戸に在つて滿洲貿易に指を染め、東上して物理學校や法律學校に研鑽怠らず、其結果神戸税關に佃一豫氏の下で、事務官補に任官されたのが明治二十九年でありました。

頭腦明晰、執務練達なりし此人は、元々海賊志願の型だから、逆も俗吏の窮屈裡に永く忍ぶ能はず、正月の屠蘇機嫌に好佞なる同僚を撲り仆したを機會として、會計検査院に榮轉すべからる先輩の愆愆も弊履の如く顧みず、偶々縁あつて共済生命に這入つたのが、鴻田さんの保險國人たる第一歩で、時に明治三十五年その日給六十錢でありました。

「夜業をするのは、朝鮮人式亡國の執務法である。規律と秩序の整然たるものあらば、時間外の勤務の有るべき道理でない」と謂つて、夜勤の宿弊から同僚を救ふ建言をして、遂に社内の夜業を一掃し得たのは、入社して間もないことでありました。

苦 節 二 十 年

保險學會雜誌上

保險料積立金と群團計算の法式に就て

を發表して栗津博士から存在を認められ、

解約價格算定の法式に就て

を發表してアクチュアリー會員となつた鴻田さんは、森村金藏氏から帝國生命の統計課長に推薦されたのを断り、安田善助氏から格段の殊遇を受ける内に、三十九年栗津博士の推輓で萬歳生命創業に参劃し、社長藤村義苗氏と肝膽相照すに至つたが、其後萬歳は日華と合併することとなり、此合併不能と共に鴻田さんは、常務取締役を辭することになつたのであります。

苦節二十年、萬歳生命の一角から保險界を睥睨し、權勢に依阿して萬古の凄凉を取らず一時の寂寞を受けても、身後の身を思ふ概を示すのである。五男二女と長息女の生んだ二

人の孫さん達と共に、専念家庭の和樂に没つて居る事でありませう。

附記 鴻田さんは、其後壽生命に聘せられ、アクチユアリー兼支配人の要職に在ります。

天

一一、山岳讚美から保険に志した河野九峰氏

人間の研究

海拔五千尺の東霧島山が噴火して、登山中の外人連が負傷し、之がため山麓に巡警の屯するあり、普通人の登山を禁止した裡を潜つて、十五歳の明治二十四年九月、杵築藩の侍講を祖父に持った河野さんが、頂上を見極めて天の逆鋒の靈威に感じ、爾來南は九州から北は北海道の阿寒嶽まで、殆んど宇内の山岳といふ山岳を踏破し、其間富士に登ること實に三十三回だといふ。「开慶に山登りばかりして、どうするんだ」と、親戚の人から詰問された時「俺は、登山によつて、人間の本體を研究してゐるのだ」と答へた此人は、如實に冷厳崇高の山上生活により、心事の清澄を得ると共に、自然に對する畏敬を見出したのであります。

ります。

人間の研究に、それ程興味を持つなら、人間其物の生存意義を基礎とする保険事業といふものがある。保險會社に入つたが宜からうと慫慂されて、早稻田大學を卒つた後、明治三十三年に入社したのが、當時五大會社の一たる内國生命でありました。

立體的向上

雄大峻峻なる山嶽を登攀して、微妙なる自然の靈感に打たれた河野さんは、日本古事記を心讀して、我々の祖神が、山の上から即ち雲の上から、古代諸民族の思想を統一し、諸蠻族を平定したる迹から見て、天與の地勢に倚る大和民族は、先天的に世界統一の使命を帯びるものであり、直下足許の日本過去の文明に眼を放つとき、そこに日本人本然の姿が潜むのである。徒らに泰西の文藝智識に憧憬して、偉大なる日本古來の文物を顧みざる現世は、八千年前の建國以來、唯心的に我々父祖の固め來つた日本の金城湯池が、較もすれば歐米の物質的唯物主義の文明に、搖り動かさるゝものであると、慷慨するのであります。

た。

現代の青年が、唯、鳥瞰的に洋本原書に心酔して、舶來の智識に盲目となる前、先づ我々の心眼を開き、日本人本來の潜在意識に目醒めて、立體的に山岳的に向上發展しなければならぬ。と云ふのが河野さんの持論であります。

保 險 の 普 通

人間の生存と死亡、人間の醫學と統計とから成り立つ保險事業に興味を感じた此人は、遂に専ら保險事務に精進し、其當時の各社に率先して、大福帳式の諸帳簿をカードの様式に改め、狷介不羈の天資を屈して、恪勤勉勵の事務家となり了したのであります。

保險事業は、決して營利本位に經營さるべきものでない。區々株主の配當のみを基準として、契約者被保險者の福祉を度外に措きて發達し行くべき事業ではない。飽く迄も民衆と共に共存共榮の大庭を押し樹て、人類の幸福増進を眼目とし、堂々發展の歩武を運ぶべきである。零細なる保險の掛金を掠めて、私腹を肥やし私利を計らんとする徒輩には、斷

じて保險事業に一指を染めさすべきでない。といふのが河野さんの主張であります。

津 ら ぬ 意 志

山岳の美を謳歌し、人間の眞善を自覺し、保險の使命に邁進する河野さんは、明治四十年暮、偶々富士生命の創設に参劃し、今日は同社の中心として、保險事業にいそしんで居るのであります。

富士生命に於ける河野さんは、永く庶務課長を勤め、遂に取締役兼支配人に進んだが、其後重役の交迭によつて取締役を辭し、支店長の椅子に座ることになつたのだが、平然として其の地位に甘んじ、環境に因つて志を渝えない其信念に對して、絶大の敬意を表さずには居られません。

「いかな悪人の邪念も、天表に聳ゆる山靈に觸れては、忽ち神聖化し清淨化するものです」と説く此人は、山上に粥を啜り、蕎麥粉に親しむ簡易素朴、神ながらの風貌を以て、語つて呉れるのであります。

一一、其氣宇の尋常ならざる久保義美氏

保険の眞髓

機械の力に依らず、生産の事業に非ざる保険の仕事は、強ひて謂へば、信用ある保険証券の販賣事業でもあらうか。此頃Y社にU氏を訪ねた時、「保険會社に人格者なんか居ないよ。各社の營業案内の書き方を見ても解るぢやないか」と云つて、自分の會社の保険料の安い事、利益配當の多い事、契約高の巨大な事を吹聴する有様は、普通商人さへ敢てしない所で、三越が白木屋より手拭地が安いとか高いとか、廣告して客寄せをしたならば餘ほど可笑しいものだらうが、开れを一向同業者同志が、互に他を誹謗しつゝ自分の會社の地盤を擴めて居るではないか、と排他自薦の陋習を、苦笑しつゝ話すのでありました。

保険事業の眞髓が、「人」と「人」との関係で、殊に外部に折衝する勧誘事務擔當社員の操縦が、結局社業發展の歩武を進むる所以である意味から、保険界に於ける久保さんの存在

は、そこに多大の人間味を発見するのであります。

本然の自覺

大正九年春、日清生命に九州の支店長時代に、東神火災創立當時、現在の反町事務に見出だされて、火災保険に無經驗だからと固辭したのを、「ナニ人間の操縦さへして呉れれば充分だ」と説かれて、遂に火災保険界に入つて、同社の支配人の椅子に座ることゝなつた久保さんは、十年の生命保険の生活に、やれ代理店接待の、やれ募集應援のと、酒に暮らし酒に明かした習慣を一掃して、生命保険に比較すれば、寧ろ入り難く解し難い専門的の火災の仕事に精進し、こゝに自己本然性に目醒めたのであります。

徹宵酒を呼んで豪快の氣を吐いた此人が、火災保険業の秩序的なる事務に没頭し、嚙席に親しむ機會も少く、不養生の因襲を打破し得たその面上は、非常に明るく朗らかな氣分を、常に泛べるのであります。

地位の轉換

世俗的に謂ふなら、一國の大臣宰相になることは、或は其人にとつて、出世したことも知れない。が現代の世相は、其人が大臣であるからとて其人自身が己惚れるほどに、世人は買つて呉れない。否、一たび臺閣に其名を列ねたゞめに、却て其人の沽券を落すやうなこともある。然るに特種の保険界に於ては、重役者、幹部級の人達が、其下僚に蒞む態度の、いかに専恣に横暴であるか、それが社會の智識階級者たるかを、疑はしむることがあります。

若し夫れ、資本家閥の故を以て、取締役たり監査役たる人々を、赤裸々にして下級の仕事に従はしめたならば、果して平素叱咤する下僚の難役を遣りこなすだけの、潰しの利く人間が幾何あるであらうか。此點に於ては、社長にも専務にも、將た又庶務の受付にも、行くとして可ならざるなき融通無碍の、渾然たる人格美を、久保さんに發見するのであります。

長者の風貌

長崎縣の島原藩に生れた久保さんは、富裕の家庭に、現在七人の兄弟姉妹を有つて居る。之を望んで一片武骨らしき九州漢の、接しては温良玉の如き長者の佛あつて、曾ては、浪荒き福岡博多灣頭、玄洋社の兵子達と意氣投合し、仍て保険募集に多大の實蹟を收めたこともあれば、淺酌低唱の間、地方の代理店主や出張社員に其高風を欣慕されて、悠然泰然裡に、當年筭にも棒にもかゝらなかつた底の生命保険辛辣の外務社員を、擒縦自在に驅使したこともあります。

酒客が、酒を断ち酒を禁めて、其面上一抹の淋しみを漂はすは世の常である。酒を使つて痛快なる久保さんが、酒を用ひずして、其の間一點の不自然を發見せしめざるところにやがて此人の氣宇、徒らに尋常一般でないことを知るのであります。

附記 久保さんは、其後病を得て職を辭し、悠々故山に長嘯しつゝあります。

一三三、生保協會理事長を辭する矢野恒太氏

純保険料式

生命保険の保険料積立金の制度に關して、純保険料式を固持する片岡商相が、多くの會社のチルメル式を採用するに制限を加へ、追ては純保険料式に改めしむる前提として、先づチルメル式計算を五ヶ年に短縮する説を主張するや、突如保険界は、蜂の巣を叩いたやうな騒ぎを演ずることになり、大正十五年の二月、商工大臣は、生命保険協會に當業代表者八十有餘名と、會見することになりました。

之より先き、此問題の劈頭、第一生命社長の矢野さんが、協會の理事長たる關係から、大臣と私交的に意見を交換したることあり、而も第一生命は純保険料式だとあつて、同業會社から、端なくも猜疑の眼を以て見られ、或は囑に惡聲を放つを耳にするのでありました。

協會の元老

二月二十四日の協會に於ける主務大臣の態度は、懇談的のものに非ずして高壓的のもの

であり、純保険料式の説明に非ずして、チルメル式五ヶ年短縮計算の、斷乎たる主張でありました。

初め片岡商相が、保険界出身の大臣たるが故に、そこに多大の期待を以てしたる列席の當業代表者は、いたく其豫想を裏切られたると共に、矢野さんに對する疑惑の念は、茲に一掃し得られた譯であります。

然しながら矢野さんの其當時抱かされた不快の念は、故なく癒ゆるものではなく、越えて二十六日、公式に理事會長辭任の書面が協會に提出され、矢野さんの推薦した藤村專務理事も、いつ何時、どう進退するに至るか、形勢端倪すべからざるものがあります。

斯界の元老阿部、福原二氏は故人となり、今又矢野さんや藤村專務を協會から失ふとせば、これは唯に、生命保険協會の損害たるに止まるまい。チルメル問題の餘波として、いかに巧みに此事局を拾收して行くでありませうか。

人同の壽命

「日本男子の平均生命は、四十四年二分五厘といふに、六十年といへば、人並よりは十六年も儲けて居る。スリ半鐘も鳴りませうか。」といふ矢野さんの、過去保険事業に於ける足跡は、可なり鮮明に深刻に印せられて居る。共済生命の前身五百名社に、當年の安田善次郎翁を助けて、保険の第一歩を踏み入れ、「非射利主義保險會社の創設」を望んで、第二歩を日本生命の片岡社長と仕事をする事に運んだ。安田翁が人格を認めないといふので、共済を飛び出した矢野さんは、診査醫として待遇改善案を提げて片岡社長に肉薄し、京橋の逆旅挑李館の樓上、辭表を叩きつけて日本生命を去つたのであります。

それから、飄然として海外に遊び、獨逸のゴータ會社に、保險業相互組織の特長を研究し、歸朝後は、栗津、志田、玉木の諸學者を別にして、保險事業實務家としての、權威者になつたのであります。

浮世の因果

明治三十二年、主務官廳に保險課が置かれて、その第一世の保險課長となつた此人は、

故法學博士岡野敬次郎氏と協力、保險業法施行細則にまで、其精緻の頭腦を働かし、先きに日本生命の社長としての片岡氏を、監督官としての立場から、日本海陸運送の内容で苛めつけ、今次、片岡氏が商工大臣として、チルメル問題で當業者に監督振りを發揮し、其餘沫の及ぶ所、遂に矢野さんが、協會の理事長を辭するに至つたは、浮世のカラクリ、妙に興味深いものがあります。

蒼々と晴れ渡る空に、際涯霞む水煙の浪を眺めて、終日のたりのたりの春の海を友とし鎌倉の海濱ホテルに徹恙を養ふ矢野さんが、老來益々元氣の旺盛ならんことを、斯界のため祈つて止まない次第であります。

一四、議政壇上に氣を吐く金光庸夫氏

國家の選良

議會を見る眼に三種ある。其一つは、議會制度の萬能主義者で、議會にさへ多數を制し

得べくんば、以て天下の大道に横車を押し通して差支なしとし。他の一つは、現代議會の改造主義者で、議員現在の腐敗墮落に撃墜して、今日の世相を救はんがためには、断じて斯る議員を一掃し去るべしとす。二者何れも偏見たるを免れないであります。

議會の内部にも、自ら二種類の區別があつて、代議士に當選し得るだけを以て無上の光榮となし、眼中大臣も先輩もなく、「低能」だの「莫迦野郎」だのといふ怒罵の聲を、演壇に野次り飛ばすものと、今一つは、眞に國家の選良を以て自らを見出だし、實名の有頂點なく、實實に其職責を盡すに努め、時に黙々として起つたり坐つたりの間に、泰然として議員の重きに任ずるもので、何れも「男の中の男」だと、自負する點に變りはありません。

斯業の代表

保險關係の従業者約十五萬、身を挺して男の中の男として起つ人少く、偶々此少き其人の中に、保險事業出身の代議士たるを忘れ去ること、尙當選後選舉民の存在を無視するに異るなき今の議會に、金光さんの存在するは、誠に業界のために力強く心丈夫に惟はれる

のであります。

大正十二年五月の生命保險大會に於ける、「契約者の拂込むべき保険料に對する所得税を免除すべし」といふ決議案を提けて、之を建議案として四十六議會に提出し、兩院を通過せしめて、各生命保險會社や契約者の利益を増進すると共に、斯業に資する所甚大なるものありしは、金光さんの各しまざる努力の賜でありました。

簡易保險契約金額引上げに對して、四十五議會に三百五十圓説を固持して、遂に之を貫徹したのも、金光さんの大なる努力の賜でありました。

黨首の握手

本年の議會では、與黨も野黨も、政府も政黨も、均しく議會の解散を怖れた。解散を避くるがためには、少々無理があつても、既成政黨の妥協に努めることは是れである。之は頓て接觸し來らんとする無産階級に對する、防戦の一つとも見られます。

此間に處して、政友本黨の去就は、政界の波紋を劃する上に、大きな鍵でなければなり

ません。

憲政會總裁としての若槻首相と、床次政友本黨總裁との會見は、此意味に於て、重大なる局面轉廻の一運動であつて、金光さんが暗中に飛躍し、兩者交驛に貢献したこと多きは本黨の院内幹事として、一舉手一投足の勢に過ぎないとのみ、看過ごすわけには行きませぬ。

重厚にして腹に底力ある此人は、政界に於ても、自然重きをなし、政務調査會に第四部長たり、商工、逓信及大藏各部會の主査であります。

税制の整理

今次の議會で、税整と關稅とは重大なる問題であつて、曾て福岡縣に稅務署長たり、長崎に稅關長たり、熊本に稅務監督局長たりし金光さんには、實に得意の舞臺だつたのであります。

大正九年大分縣第二區から打つて出で、大正十三年に同じく總選舉に當選、漸く知命の

齡を以ての奮躍振りは、前途更に期して待つべきものがあります。

明治四十三年鈴木商店を代表して、太陽生命に取締役兼支配人となり、大正二年大正生命の創立と共に入つて支配人となり、前事務岡烈氏の他界後、現在同社の専務であり、日本教育生命と新日本火災海上の、専務取締役をも兼ねて居ります。

由來保險事業界を出で、議政壇上の闘士たる人に乏しき現狀にあつては、金光さんの切々自重あるべきを、斯界のため祈つて止まない次第であります。

一五、社會劇『雪を凌ぎて』の作者池田龍一氏

善巧の方便

池田さんは、日清生命の社長である。つい先達、日清生命の宣傳用映畫として社會劇『雪を凌ぎて』が、全八巻七千三百呎の活動寫眞となり、其封切披露のあつた席上、早稻田の鹽澤博士から、「獨逸に留學當時、池田君とは同窓であつたので、池田君の道樂方面は色々

知つて居るが、斯麼道樂があらうとは想はなかつた。」と頗るユーモアに富んだテーブルス
ビーチのあつた程、事實池田さんは、圍碁、撞球を初め其趣味極めて汎く、殊に長唄に至
つては、吉住家元に入門、坪内博士から小三郎直傳の妙聲家と折紙をつけられ、之を以て
宋をひきゐる善巧方便となすに對して、贊辭を受けたのであります。

愛兒の早逝

獨逸に留學してドクトル、フォン、ユーリスの學位を得た池田さんは、其生國伊豫が子
規、盧子を出だした俳郷である關係上、星野麥人を師とし、俳號を吟雨と稱して俳三昧に
耽つたこともあつたが、大正十一年春、長子息を喪つて以來、兎角人生を觀る眼に哀愁の
深きものあり、其寂寥陰鬱の間に好きな道樂を廢めて、時に職務上旅行の途次も、轉々車
窓に映じ來る山川風物亦旅情を慰むるに足らず、見るもの聞くもの、却て悲哀の情をそゝ
る種子となつたのであります。

「私は、今日までこんな弱い男と思ひませんでした。今後少くとも十年や二十年、まだ活

動する積りで居るのに、こんな弱い氣で居てはいけない。何とかしてこの厭な氣分弱い氣
分を一掃せねばならぬと考へ、絶えず苦悶して居ましたが、ふと心機は一轉して、何時迄
も、再び歸らぬ亡兒を追想するの愚を悟り、是と同時に我兒同様、創立事務の第一日から
早稲田大學の教鞭を抛つて愛しみ育て、健全に成長した日清生命の、十五周年を記念す
るため、一つの宣傳劇を考へて見ようと思ひ付きました、或は車上或は旅舎に、萬年筆を
走らせて書き初めたのが此脚本であります。」と池田さんは告白するのであります。

今昔の感慨

今は昔、日清生命が契約高一千萬圓達成祝賀の當時「自分は、眞劍に此事業を經營する
者である。若し、自分が此事業に失敗するならば、他の何の仕事にも失敗するであらうこ
とを觀念してゐる。従て、此會社の諸君に於ても、此會社に永く従事する能はざる底の人
は、頓て他の如何なる方面に志しても、満足に成功することは出来ないであらう。」と平素
の温厚振りに似ぬ斷定を、列席した社員の頭上に浴びせかけたといふ。果して、物變り星

移り、小姑多き難境を切り抜けた當年の池田専務は、其抱懐する理想を着々實現して、押しも押されぬ今日の池田社長となり了した。この池田さんの隱忍自重に至つては、寧ろ泪ぐましい想ひ出が多々あることでありませう。

梅花の苦節

日清生命創立の當時、早稻田大學を基礎とするといふ文字さへも、敢て廣告文に發表することを憚つた當年を顧みれば、故大隈老侯を始め、澁澤子爵其他早稻田大學關係諸名士全部を畫面に收めて、堂々日清生命の宣傳劇と銘打つたる映畫の公開は、池田さん其人にとつて、眞に今昔の感に堪えないでせう。

けにや今月六日、永樂俱樂部に於て、保險機關關係者と映畫關係の家族一同の前に、封切披露した當夜は、池田さんの夫人(故野津大將の息女)の令姉(上原將軍夫人)の不幸通夜の際であつたが、其取込の時間を割いて、飽かず畫面を見入つた此人こそ、正に雪を凌いで咲き誇る梅花、其ものゝ苦節があつたとも謂ひ得やう。劇中のヒロイン咲子は歌ふて

曰く、

魁けて世に匂ふらん梅の花 降り積む雪を凌ぎくつて、と。

附記 池田さんは、昭和四年二月十一日、瀆焉として逝きました。享年五十八、悼むべきかな。

一六、商業學校長の經歷を有つ小比加秀一氏

教壇の道心

保險國人十五萬、實業界の一角を占むる多士儕々の一王國、そこには、隨分毛色の變つた人材の存在するを否めない。だが、保險事業の眞髓が、宗教に於ける布教の如く傳道の如く、爾く救世濟民を目的とし、營利のみに汲々たる普通事業會社の圈外に、超然一國を形成するに於て、會々小比加さんを一員に數ふることは、斯界の矜りでなければなりません。

小比加さんは、高松の松平藩の出。明治三十六年、當年の東京高商を卒つて、實業學務

局長眞野文二氏(現九州大學總長)の推薦で、和歌山縣立商業學校長たる八年、更に門司市立商業學校長たる三年にして、翻然其歩みを、保險事業界に進め來つたのであります。小比加さんは、現に、大北火災の營業部長であります。

側近の便倅

一世の快傑西郷翁の銅像を右に眺めて、上野驛から省線電車十秒を過ぎすと、三錢、五錢、八錢均一の、何やら食堂の屋根看板が見える。和洋何れの料理でも、安きこと正に偽らざる其看板の如く、出入の客は群をなし、三錢のコロッケ、十錢のビフカツ、十三錢のカキフライ等々數皿を平けて、猶且五十錢銀貨一枚で事足る。要は、量少なく皿數多かるべき仕組の營業方針で、これと保險の事業内容とを比較するならば、餘りに問題が滑稽に失します。

然しながら、世間によくある事業會社の内部組織が、折角傑出したる社長を戴きながら時に側近者の御殿女中式が果をなし、之がため可惜社長の賢明を掩ふ例は、尠くないので

あります。

若しそれ、これに類する保險會社ありとせば、徒らに其顧客雲集の殷盛振りのみに矜つて、内容の皿數に於て吟味を要する彼の食堂との比較は、似て非なるにあらず。非にして似たる點ありと謂ひ得るのであります。

無言の告白

三十萬圓の巨費を投じて、全國一の模範的校舍を門司に建設するため、當時の市長永井環氏の計畫に參與して、遂に其校長となつた小比加さんが、忽然その名譽の地位を捨て愛撫する子弟と訣れて、同窓の高田久(故人)黒田馨介兩氏の帝國火災入りに隨伴し、保險界に一步を踏み込んだ決意は、そこに如何に多大の期待と抱負とがあつたか、想像するに餘りあるのであります。

帝國火災に神戸支店長たる六年、本店の樞機に關與する一年にして、颯々乎とし門司商業創立時代の知己たる大北火災の社長に招かれて、そこに走つたのであるが、其間の消息

に就ては、一切黙して語らず一抹の暗翳あるやなしやも、告白しないのであります。

驛頭の別離

小比加さんが教育界を去らんと發表するや、其訓育に與かつた子弟は、市廳を襲ふて其轉職阻止の運動を起こし、遂に其止むを得ざるを悟つて、下關驛頭、相擁して涙を抑へて別離を惜しんだ子弟の情誼は、一幅の劇的シーンであつたと當時の讀賣新聞紙は、教育界の美談として、賞讃の辭を吝しまないものであります。

曾て和歌山商業に着任するや、ストライキの最中で、行李匆々之を鎖撫した時と、帝國火災に於て現黒田事務外遊の不在中、本社に寢食を忘れて事務に没頭した時とは、共に過去を通じて、身心を抛つて更に愉快であつたと語ります。

草紙に文字を書いた商業學校當時に比較して、白紙上、一點一畫も忽諾に附し得ざる保險會社生活は、二者自ら氣分に相違がある。と微笑を以て話すのであります。

大北火災は、宜い人を得たのを悦ぶべく、一方帝國火災のためには、一異彩を失つたの

を惜しまねばなりません。

追記 其後小比加さんは更に、神戸海上に、榮轉したのであります。

一七、萬卷の書籍を讀破する寺田四郎氏

學者の勇氣

明治維新の當時、江戸は戰禍の巷と化し、慄然色を失ふ丁髷町民の眞ッ唯中に、殷々轟々の上野山下山上の銃聲砲聲喚聲に耳をも假さず、泰然靜然平然、經世濟民の學を講じて動ぜざりし慶應義塾に於ける福澤先生の膽勇は、今に有名な話である。保險界の一角に於て、之に匹敵すべき話材あらば、以て異としなければなりません。

大正十二年九月、關東地方の大震災は、交通運輸通信の途は杜絶し、現世の幻滅かとはかり、國を擧げて仰天して居る眞ッ際中、丸の内は富士生命の樓上、自宅が震火災で焼失し去りたる後を、微かな蠟燭の光りを手頼りに、讀書三昧に耽つて居るのは、同社事務取

締役の寺田さんでありました。

地震と約款

此の寺田さんの研究は、震火災に對する火災保険金支拂問題に、明快な論文が發表される結果を生みました。

地震國に生れて、地震約款に無頓着なる日本國民が、「一會社の利益保障の爲めに、多數災民の安固を脅すが如き」ことなかるべき大詔を奏請し、「保險事業の如きは、其の性質上社會公衆の安固を目的とするものなるを以て、此の重大なる事變に顧み、幾十萬の信頼に負かざる様犠牲の精神を發揮して、慎重考慮を盡し」呉れとの告諭を出だした首相を頭に戴いて、呑氣に構へ込んで居た當時、火災保險會社は、約款の明文上、保険金支拂の責なきものであるとの寺田さんの法律論は、東京日々、報知、法學新報、法律新聞等に該博な識見を傾倒した。之に對して花岡敏夫博士の反對論が現はれて、兩々火花を散らすやうな論戰が聞かれました。

不斷の精力

寺田さんは、明治四十四年東京帝大法學部を卒り、海上法を専攻して海外に在ること九年、獨、英、米、佛、伊、西、瑞等の諸國を歴遊して、我國法學界の一權威であり、世界戰爭講和會議に際しては、交通委員及び戰前契約委員として任命され、叙勳の榮を得たのであります。

堂々たる體軀を有つ此人の旺盛なる精力は、尋常一様の安逸放恣の重役生活と違つて、寒暑を問はず風雨を論ぜず、將た前夜の宿醉如何にも關せず、毎朝必ず五時に起床して、書を読み筆を走らし、孜孜切々として倦む所無く、研鑽を積むのであります。

されば、其の讀書の範圍も極めて汎く、遊學した海外七ヶ國語の各原書は固より、日本の新刊本にも一通り目を通し、曾て、東北大學の東川圖書館長が、筆のすさびに書いた梅博士の傳記までも讀了して居て、十五年前に讀んだ其の内容に就いて、歴々話題に上せたと云ふことで、其の著者の親善者が、その記憶力と讀書力の偉大さに、驚異の眼を睜るの

でありました。

讀書の趣味

學窓を出でたる青年男女、校門を潜り去ると同時に讀書と遠ざかる者珍らしからず、殊に各種事業會社中、數理統計醫學を基礎とする保險の従業者にして、其の専門の智識にさへも疎く、甚だしきは昨今問題となつた生命保險の、チルメル式積立金に對し、嚴正なる批判を誤るなきは別として、之が理解をも有たずし済まし行く人の、妙からざるに驚かされるのであります。

一日に十頁づゝ讀んでも、一箇年三百六十五日の間には、三千六百五十頁を讀み得べく其れだけ智識を得ることにて、一年中に二三百冊の書籍に眼を曝らすは強ち難事でない。而して寺田さんの「丸善」に支拂ふ本代丈りで、一ヶ月平均二百圓を下らない相です。

明治天皇御製「ぬば玉の夜こそ書は讀むべけれ あだし事には心うつさで

附記 寺田さんは、其後會社を退き法學博士の學位を得、悠々閑日月を送つて居ます。

一八、馬上に豪快の氣を吐く尾崎庄兵衛氏

面砲と横根

大正十五年、中央生命社長前田男爵の保險關係新聞雜誌記者招宴の席上、専務取締役から副社長に昇格した尾崎さんのテーブルスピーチは、その抱負と經綸とを傾倒した熱情の迸りであつたが、言中富意即妙の極めて奇抜な比喩があつて「諸多の會社中には風袋の大を以て矜り、若くは其大ならんことにのみ努むものがある。徒らに圖體の大にして、或は内臟機關が癌腫のために侵す所となり、或は結核、梅毒等病原菌の侵す所となり、靡爛の腐肉を曝らすものなきにあらざるも、わが中央生命に至つては、過去の青年期に於て、或は面砲の痕位はあるかも知れない。或は横痃を切つた創痕位はあるかも知れない。然しながら、高き天の下潤き地の上、無病健全の現状を誇りたい」と、意氣大に昂つたのであります。

運 減 の 法 則

六

尾崎さんは又かうも語つた。人間の力には經濟原則が行はれ、會社經營も此意味からして、デミニツシング、レターンの法則に基き、新人の輩出が望ましいとて、後任新專務の人格を賞揚するのであります。

明治四十四年東京帝大を出で、以來、足掛十四年の歳月を中央生命の創立から、募集課長を経て副社長を贏ち得るまで、そこに如何に重疊の波瀾を凌ぎ來つたか、如何に崎嶇の道程を辿り來つたか、輝く炬眼と堅く結ぶ巨口とは、切磋弛みなき強き意志の力を、表現して餘蘊なきものがあります。

團體生活の要諦は、名君又は名宰相の專制の政治であり、獨裁政治でなければならぬ。凡て關係者の諒解の下に獨裁專制主義を實行し來つて、初めて專務重役の重責を辱しめないのである。と説くのであります。

馬 上 の 朝 風

毎朝六時に厥起、中學以來怠りなき冷水浴に生々の元氣衰へざる尾崎さんは、佐竹博士を會長とする四六會の常任理事で、砲工學校に毎週二回、習志野の騎兵學校に毎月一回、乗馬に豪快の氣を行るのであります。

曉風に馬の鬣を翻らせながら、鎌倉に玉川に東村山に、一泊二泊の遠乗する愉快さは、話を聴くだけに羨ましく惟はれます。

肉體と精神と私經濟上の獨立とは、是れ處世の三大要件であると説く此人は、健康と生活とから、人格の閃きを見出さんとするが自然の理法で、野外騎乘に愛馬に鞭打つて、脂粉の香にのみ荒み去らんとする保險國人中、一異彩を放てるを多とすべきであります。

貧 民 の 救 療

尾崎さんに就て、特筆大書せねばならぬ隠れたる一美德がある。謂ふは易く行ふに難きもの、人の陰徳に外ならぬ。人間の福祉増進を目的とするわが保險事業界、果たして能く人類愛を高唱して、自己に恥ぢざる人士のみがあらませうか。

上野櫻木町に、社団法人で同愛社と稱する貧民救療の機關がある。濟世會の如く面倒臭き手續を踏まず、手軽に簡単に醫藥の資に窮する病める人々に施療するのが目的で、明治十何年の創立以來今日まで、百二十三十萬人の生靈に醫療を努めてゐるのであります。

國家及社會から何等の補助と聲援なくして、市内に開業せる成功した資財の安定せる國手を相手に、六十ヶ所の救療所を設けて、救療社員と慈惠社員とが、孜々黙々乎と貧民救療に努めて居るのが、この同愛社の同人であります。

幾たびか、先帝、今上兩陛下から褒賞を賜はり、識者推賞的である同愛社は、榎本子爵の後に前田子爵が其社長となつて、現に尾崎さんは、帝國生命福原故社長の後を継ぎ、その監事として中央生命の經營以上に、久しき前から此方面に努力精進するのであります。

附記 中央生命を退いた尾崎さんに、其後兎角の噂に上つたが、昭和三年一月十三日他界しました。時に享年四十七歳。

一九、沖繩縣唯一出身者の仲宗根玄愷氏

孤島の沖繩

この頃の東京日々新聞紙上「海南の蘇鐵地獄」と題し、孤島苦に泣く八十萬の琉球島民救済のため、輿論作興に資せんとして、特派員報道の一文が連載されて居ます。

文化生活の現代を矜る帝都の一隅に於てさへ、なほ大正十五年の今日、一ヶ月大枚九十八錢也を以て、衣食住の生活費を支へ得る同胞があるのだ。簡易朴素、鬼界ヶ島の彼方沖繩諸島が、いかに首都を去る一千二百六十八海里の船路遙けき地點なるにせよ、一週二三回の交通あるわが日本の領土である以上、出生過多、産業萎微、物資不足の故を以て、眞に蘇鐵地獄の慘に泣くが如き現状であるならば、之は實に聖代の奇ッ怪事でなければならぬ。そこで仲宗根さんをお訪ねしたのであります。

仲宗根さんは、東海生命の取締役兼副支配人で、保險國に於ける沖繩縣出身の唯一人者

であります。

祖先の由緒

曾て私は、伊江男爵家の當主朝助氏（源爲朝の末裔、尙公爵の分家、前沖縄縣會議長、現貴族院議員）から、保険界に於ける仲宗根さんの存在を屢々聞かされた。伊江氏は琉球が、支那の領土か日本の一部か判明しない時代に、琉球王家に極力諫言して、遂に日本の皇威に浴せしむることとなり、之がため毒殺されて了つた盡忠無二の祖父を有つ、私の畏敬する學友の一人であります。

その伊江氏から紹介された仲宗根さんは、我朝足利氏の中葉、琉球宮古島の主たる仲宗根豊見親（親は同島の敬稱）玄雅氏十五代の末孫で「何分島國のことですから、物資の缺乏は止むを得ませんが、眞逆新聞で書き立てる様なものでもありません。所によつては、土地や財産の共有村落が珍らしくない位ですから、カネを以て物品を賣買するといふよりも、自給自足の美風が今に行はれて、餅を揚げば隣人に配り、野菜が出来れば近隣に分け

る、と云つたやうな原始生活です」と仲宗根さんは話すのであります。

丁寧な人物

保険關係同業の某誌上、共保の齋藤、第一の稻宮二君と共に、仲宗根さんを以て、生命保険界温厚懇愨の三幅對として、披露されたことがあります。

明治四十二年、早稻田大學の大學部法學科を卒つて、更に専修科に一年の研鑽を積み、時の行政裁判所評定官坂本三郎氏の懇懇黙し難く、長官山脇玄氏（故人）の下に官房に役人生活をする一年餘、四十三年に創立された東海生命に入つて、保険國人たる今日の第一歩を踏んだのが、明治四十五年でありました。

琉球の名物

琉球の名物にボクシングがある。支那から渡來せる護身の妙術で、琉球獨特の拳法即ち無手勝流の唐手である。方今巡査のサーベル無用論が唱へられて、慶應の教授粕屋眞洋氏あたりの認むる所となり、「唐手研究會」が起つて、本場の琉球では、全島の警察官を集め

て講習會を開き「警察官が、盜賊其他の犯人逮捕に際し、兇器を以て刺傷され、ために職に殆るゝ者あり、之が防衛策として唐手の鍊磨に努むべし」と、辻本沖繩縣警察部長などは、最も熱心な實行家だといふことを想起して、之を仲宗根さんにお尋ねすると「イヤ一向に唐手杯……」は、と謙抑を發揮するのではありません。

讀書の外は、碁も將棋も玉突も、何等の趣味なき此人が、琉球名物芋の泡盛で練え上げた酒量は、仲々内地の如く酒に水を割つたのか、水に酒を割つたのか判然しないやうな酒盃に對しては、敢て例の謙抑の辭もなく、寧ろ笑つて答へないのであります。

二〇、一見茫洋乎たる異材下田寛治氏

西南の戦争

明治十年、蓋世の英雄西郷南洲先生は、時利あらず、桐野、村田の諸傑と共に、攻め倦ぐんだ熊本城を捨て、秋風骨を埋むる故郷の山を直指して、一道の活路を無二無三突出

し、遂に城山の露と消え去つたのであるが、その熊本に於て、十重二十重に取り圍まれた死地を脱却し、途上最後銃劍の矢叫びを擧げたのが、菊地郡の城北村（熊本市を距る六里の地點）であつて、吹く風も枝を鳴らさぬ聖代の今日、現存の土塀や器物に、尙銃丸の痕迹を止むるといふ其村に生れたのが、下田さんでありました。

勝てば是れ官軍であり、負ければ則ち賊軍の汚名に、忍従せねばならぬ戦亂の時代に、當年五六歳の村童たりし下田さんが、いかに小さき胸を驚かしたことでありませう。

文化の缺陷

方今文化の生活は、弱者の惨敗を如實に物語るものであり、交通機關の奪ひ合ひ、物價騰貴の血眼振りは、さらぬだに神経を彌が上にも苛立だせ、他を排して自らを安きに措かんとする處世の方針が、口に博愛を説く説教坊主も、演壇に謙讓の美德を説く道學者流も、急用を抱へて満員電車の、何十臺を見過ごす餘裕は逆もない。喰ふために道を説いても、生きるために徳を説いても、畢竟夫子自らが、針の尖端の如くに鋭き神経の持ち主となる。

無智にして教養なき奴輩の、我物顔に横行する世相が、更に世を擧げて社會を毒しつゝあるのでもあらう。策士徒らに策を弄し、功利者徒らに功利に奔り、陰險譎詐の小才子のみ多からんとする保険界に於て、茫洋として毀譽を念とせず、利害を超越して晏然たる人あらば、以て敬意を致すに足る。之を帝國火災の取締役兼庶務課長にして、八千代生命の重役たる下田さんに見るのであります。

蔗旗の説得

明治三十何年かに、山口縣の吉敷郡長は、混亂せる鑛鏡寺村産業組合の争鬪鎮定に、護衛巡查數名を俱して出かけたといふ。巡查の佩劍の音は、却て蔗旗を押し立てたる村民の激昂を買ひ、調停の困難よりも、更に身の危きに瀕するに至り、之が應援のために縣廳から知事の指名により一縣吏が、單身草鞋穿きのまゝで民衆に折衝し、先きに郡長の意見に反抗した村民も、機宜に適せるザツクバラシ式短刀直入的の説得に悦服し、事なく圓滿の終局を告げしめたといふ。その縣吏こそ、保險國人下田さんの前身でありました。

之が機縁となつて、その山口縣知事渡邊融氏の見出す所となり、明治四十三年東京府農工銀行に推薦され、延いて勸業銀行を背景とする小原達明氏の八千代生命創立に参加し、而して現境に一步を踏み込んだのが、實に大正二年でありました。

茫洋の資材

熊本市には、後年藍綬褒章を賜つた漢學の鴻儒澁江公寧先生が在つた。此門人として儒學の造詣深く、更に熊本の法學院を出でた此人は、一面頑固の誹謗を受くる漢學畑の出身として、融通の利かぬ點があり、一面法律研究者の通癖として、屁理窟を振り廻はす點がある。それを掩ふ茫洋乎たる素質は、時に會社荒らしの暴力團、總會荒らしの壯士團に對して、甚だしく要領を得させぬ底の、苦手であるに相違ありません。

上長重役者の疍癖、忽ち發しては怒罵となり落雷となる。此時よく忍ぶもの、必ずしも無意識裡の無關心に了るべきでない。若し開れ茫洋乎として、低氣壓の奈何を顧念せず、平然晏然自己の職責を積んで年を経る者あらば、以て異材と目することが出来る。下田さ

んは、この茫々焉漠々乎たる天資の性格を以て、波瀾多き帝國火災に、十年近き歳月を無事に通過し、尙能く八千代生命の、重役の地位までも贏ち得るでございました。

共

二二、保険事務家で博士となつた三浦義道氏

保険と博士

三浦さんは、第一徴兵の保険學理顧問であります。

嚴密に謂へば、直接現業事務にたづさはらない上から、保険事業家にして博士號を贏ち得たと結論しては、或は當を失するかも知れぬが、世間普通一般の例としては、博士なるが故に、それが保険専門の學者なるが故に、保險國に持て囃さるゝのであるけれども、三浦さんは、明治四十一年東京帝大を卒つて、今の會社に聘せられ、大正十一年博士論文「告知義務論」を提出、翌年博士會の推薦によつて博士となつたのであるから、第一徴兵は三浦博士を生み、三浦さんは、第一徴兵の實務を見ながら博士となつたので、此意味に

於ける法學博士は、業界唯一人の三浦さんであつて、つまり保険技術家として博士號を贏ち得た人として、三浦さんの非凡を推獎したのであります。

人格の價值

「大學は我を冷遇したり、年俸僅々八百圓、衣食にも事缺く。故に我を優遇する新聞社に入りたり」と大學教授の榮職を、蔽履の如く抛つた夏目漱石先生が、同時に文學博士號を辭退して受取らなかつたことは、當時の世人を痛快がらせたことであります。

三宅雪嶺先生が博士號を受くるとき「博士號の授與は、之を辭退する程重大に値するものではない」と、平然世間並に肩書をくつ付けたのだと謂はれます。

私は、こゝに博士號の價值を論ずるものでない。唯、三浦さんが博士であつてもなくつても、三浦さんの人格と學識とに何の係りはなく、孜孜として倦まず切々研究に餘念なき、眞に學者らしくして名利に淡きその人格美を、徹底的に禮贊したのであります。

保険の學理

三浦さんの名著「保険學」は、保険の綜合的研究を目的とし、保険に關する經濟的、法律的、數理的、自然科學的智識に由る綜合的研究を以て其對象とし、分科しつつ、綜合し、綜合したる基礎の上に、更に分科して窮りなく、保険の分科的研究を綜合して、更に統一觀念の上に之を樹立し、其樹立したる綜合觀念からして、保険の分科的研究を益々深からしめた堂々四百頁の大文字であるのだ。けにや保険技術家が、保險法理と保險經濟とを閑却し、保險法學者や保險經濟學者が、保險技術を輕んずるが如くんば、學者の思案が如何にして克く、保險制度の核心に觸れることが出來ようか。技術と法理との、微妙なる結晶とも見らるゝ保險の本質を、飽くまで一貫犀利に解説したのが「保險學」の一卷であります。

學者の態度

三浦さんは「保險學」の外に、「保險業論」「保險法論」「地震約款論」及前記博士論文の「告知義務論」あり、其他雜誌上公にしたる有益なる論文夥しく、殊に最近、必然的に生ずる營業費節約の上から、被保險者の利益擁護の立場に於て、「保險會社合併の利益」をアク

チュアリーの見地を以て、明快なる意見を發表したのであります。

第一徵兵の業務に執掌する傍、東京帝國大學及中央大學に教鞭を執り、保險學會並に日本アクトチュアリー會の幹事たる三浦さんが「私は社會生活階級上から見て、遂に落伍者たるに過ぎません」と、六年前から移り住む逗子の海岸で、打ち寄する波の音に心耳を澄ませる枯淡な生活振りを、謙抑禮讓の面持を以て語りながら、私の如き一介の野人をエレベーターまで、慇懃に見送つて呉れるのであります。

二二、食料新味に精進する山田元之助氏

人間の食料

大阪梅田の阪神電車際に、大海堂と稱して食料を商ふ老舗を見る。合資組織の商賈であるが支配人以下店員十數名、毎日三百人を下らざる顧客の出入に店頭殷盛を極めて居る。之が經營一切を引き受くるのが山田さんで、元々刀圭界の出身であつただけに、食料品に

對する一新機軸を出ださんと試み、先づ四國方面に向つて、水産物の實地踏査をなしつつあり、息子も亦、大阪の醫學校を卒るや、現に病院に研究中であるが、傍ら父の志を助けて、美味にして衛生的なる新製品を、作り出すに努むるのであります。

人間の増殖に伴ふ食量の不足は、延いて個人の争闘となり國家の戦争となる。之を解決せんとして、人類愛の見地から努力するのが、山田さんでありました。

重役の切腹

山田さんが保險事業に興味を有つて醫藥を抛ち、中央生命に保險國人となつたのは、大正四年四月五日であります。

初め名古屋支部長から東京支部長となり、大正十一年には、營業部長から取締役に擧げられ、十二年以降、取締役兼大阪支社長として天資の技倆を發揮し、自身使用人から重役の地位を贏ち得たのみならず、各支社契約高の首位にあつて模範を示し、中央生命は、關西方面の養徴振ふなき實績を、山田さんの活躍によつて刷新せられ、ために此方面の名聲を

保ち得たるの觀がありました。

由來中央生命は、創業以來波瀾曲折に富み、其間重役の新陳代謝激しく、自然山田さんも苦しい立場に座する一再ならざりしも、性磊落にして物に拘らざる無頓着は、時に重役に詰め腹を切らすやうな悪まれ役をも、敢て演じたといふ。兎も角も、中央生命に於ける最功勞者の、一人でなければなりません。

富豪の背景

その中央生命の功勞者が、今次の會社實權の移動と共に、一部重役の交代あり、翻然悟る所あつて辭表を提出し、會社は之が留任を望んで止まず、遂に數ヶ月の後、辛うじて其素志を達し前記大海堂の經營者として、晴々しい顔を示したのは、實に茲一二ヶ月ばかり前の話で、頃來頗に此人を知る方面の、噂の種子となつて居るのであります。

山田さんの出で去つた中央生命は、佐藤重遠氏が、北海道の富豪板谷宮吉氏を背景として入り込み來り、頓に斯界の話題を賑やかすのであるが、前田社長、尾崎副社長及新來の

佐藤専務を圍る間隙に就ては、盛に揣摩臆説が行はれ、或は政友本黨と、前途如何に結ばるべきや杯、噂は更に噂を生んで、却て會社の將來を危ぶむ者さへあり、此混沌たる下馬評の最中に辭し去つたのであつて、しかも開れば不平なく不満なく、眞に相互に理解ある圓滿辭職だと、取沙汰されるのであります。

一抹の暗翳

中央生命は相互組織だから、其契約者は加入の社員である。取締役を辭し支社長を辭した山田さんは、今に猶同社の評議員である。相互會社の評議員は、株式會社の代表株主と同一の資格があるから、自家の勢力圏内に糾合し得た數萬の加入社員を提けて、投する一石がいかなる波紋を畫くか、これは中央生命の、社運を卜する鍵でなければなりません。不平なく不満なく、中央生命に對する熾烈の愛社心のみを抱く此人が、若し同社に不祥なる問題の勃發する時んば、猛然立つて獅子吼すべく、之がため同社を毒せんとする如き輩にとつては、けに一敵國の感を感じゆるでもありません。

高き天を望んで、雲の去來を眺むる念頭、悠久なる人間の食糧問題以外に東の空、中央生命一抹の暗翳は、いかに感慨深きものがあるでありませうか。

二三、愛兒の早逝に涙を隠した清水文之輔氏

哀別の離愁

死生は命あり、自ら備はる天壽は、人事の以て奈何とも爲し難きものがある。然しながら幼くして夭折するを見る悲痛は、身に代え難き親心の悶えが伴ひ、同時に、安らかに眠るが如き死に直面する孝子の心盡しは、そこに深甚なる憂愁裡、なほ困憊衣帶も解かざる看護のわびしさも、人間本然の務めを盡し得た自らなる、心安さのないでもありますまい。悔るて及ばぬ愛人との、死別生別など數多かる哀情中、志を繼がしむべきいと、兒の世にも手頼りなく去り逝くを見送る親の嘆きは、身自ら其境を経ざりし者の、到底想ひ追はぬ心狀でなければなりません。

それが、人間の純真であります。

それが、人として至大至高の、親心であります。

父子の恩愛

太陽生命の専務清水さんが、愛兒を失ひて一向に悲し相な様子もなく、平然事務を見て、何等常に溢る所がない。との噂を聞いた私は、若し然りとせば、不人情極りなき人である。頼るべき愛兒を先立て、色をも變へざるが如くんば、餘りに人情味の缺けたる振舞ではないか。いかに複雑なる世態にせよ、悲んで亂れざる父子の痛嘆、そこに何の憚りがあるであらうかと、不思議に考へたのであります。

横濱の人間味あつてこそ、人類愛を高唱する保険事業の、經營に任ずる一社に、専務重役たる資格を窺知することが出来る。既に嫁したる三人の息女の外は、當年二十四歳の一粒種子の息子、専修大學の經濟學科に其榮えある前途を待てりしを、忽然白玉樓中の人と化し去つて、それも人並以上に平素頑健の體軀の持主に先立たれて、それで尙但平然たり

得る筈はない。清水さんは慈愛に富む父親でありました。

突然の凶報

昨大正十四年の暮、圓盤投げや砲丸投げに、體重十五貫、甲種合格の健康を矜る公一君が、平素寡黙にして専念勉學にいそしんだ休暇中、葉山に出遊中の出来事であつた。翌えて二月まで、正月以來風邪心地で臥せつたといふこと、だけしか知らなかつた清水さんが、突如急變の由を聞かされ、其月二十八日鎌倉養生園に、無理に其病體を運んだのは、既に絶望だと、國手から注意せらるゝ時であつたと謂ひます。

三月十二日、溘焉として逝く公一君の軀を見送るまで、いかに人の親として有らゆる苦心と努力と犠牲とを拂つたことであらう、日中は會社に事務に執掌するが、時間後毎日、東京鎌倉間を往返して、晝の疲れを休むる違もなく徹宵看護し、神かけて常の健やかな元氣に復させたいと、念じたことでありました。

それが、當然であり、自然であります。

それが、子を慈しむ親の恩愛であります。

青山の墓標

「人は、智慧と共に、勇氣がなければなりません」「勇氣は、頑丈な體力から生れ来るのであります」と説く此人の面上、愛兒の逝く前々日まで、會社の事務を忽諾に附せざりし然ゆるが如き意志の力も、唯、空ろに淋しく聞ゆるのであります。

明治二十六年、東大英法科を出で、以來、桑港に於ける皿洗ひや草捲りから、長崎商業會議所の理事、十八銀行の朝鮮總支配人を経て、太陽生命の専務となるまで、一編の小説の材料たる變轉の前半生を有つ清水さんは、青山に乃木大將の墓に隣つて、永えに眠る愛兒公一君のために、いかに悲痛の涙を潑いたことでありませう。

二四、空々寂々を自稱する田中重藏氏

一貫の勤務

田中さんは、共済生命の營業部長であります。

此人に見る保險國人たる特徴は、共済生命の生え抜きで、一貫今日に迫ること、一外交職員から、今日の要職を贏ち得たこととの、二つの點であります。

是れやがて、共済生命の社風を象徴したものであり、田中さんの隱忍自重——保險國人として、正に爾かあるべき——を、具體化したものであります。

それは、その事實が、如實に物語つて居る。即ち、

明治三十一年十月 入社事務見習。

同 三十三年五月 千葉、茨城二縣の外務擔當。

同 三十四年二月 千葉出張所長。

同 三十六年二月 新潟出張所長。

同 三十九年二月 廣島支店次長。

同 四十四年二月 名古屋支店次長。

同 四十五年二月 名古屋支店長。

大正 七年二月 大阪支店長。

而して大正十年二月から、本店樞要の椅子に、座ることになつたのであります。

現代の風潮

甲社から乙社へ、それからそれへと轉々の保險國人の生活は、特定の一社に永く勤続することを以て、異例と見られて居ます。

會社側に於ても、最初から出すことを目的として入社させるか、使ふことを目的として入社するのか、其殆んど判別に苦しむが如き態度のものあり、適所に配置すべき適材なりと鑑識して、而して後に、社員として採用するにもあらず、無見識無定見なる試験委員と稱する若輩者流が、新聞廣告によりて、數十名若くは百數十名を一時に募集し來つて、從て飽けば從て減り、更に復、新聞の廣告で社員を募るものもある。そこに拘すべき情味もなければ、見るべき道義もありません。

一定の職業に安固の生活に、同じ會社に勤続して、それで初めて會社と従業者との間に、渾然融和の熱と力とを見出し得る。共濟生命の社風と田中さんの經歷とは、深甚の意味があります。

長袖の環境

田中さんは、千葉縣印幡郡の産、初め神宮教院(神宮奉齋會の前身)に佐々木高行侯爵の下で、「教林」又は「明治會」などに、木村鷹太郎、落合直文氏等と共に、編輯の事務に没頭したと謂ひます。

然し、長袖者流の生活は、ガラに合はないとして翻然志を革め、偶々縁あつて共濟生命に入社したのが、保險國に印した第一歩でありました。

酒中の無我

毎晩、一二本の徳利で陶然たるも、募集の督勵、代理店主の接待などには、殆んど底知れぬ酒量を示し、殊に會心の友あつて遠方より來れると會同するや、徹宵痛飲して猶一向

に宿醉に悩まぬ酒客であつた。それが、五年前に病んで中耳炎を患ひ、その大手術の前後六ヶ月間、絶對に酒盃を断ちたるを機會に、再び昔日豪快の酒徒たる資格なく、全く初心者の如く極めて少量で、既に酔を發するやうになつたと謂ひます。

「平素私は、心中何等の秘密を藏しません。従て酒中無我の境に入るに及んで、口を突いて出づるものは、錯綜せる人事の不平である。ために問題を罵倒し盡して餘蘊なきことがある。醒め來つて翌朝、相手の人の處へ能くお詫びに出掛けたものです。」と、空々寂々を自稱して、譚味を帯ぶる人の宜さ相な顔の田中さんが、満面笑みを湛えて話して呉れるのであります。

二五、當代の世相に超越する岡安理平氏

將相の器宇

明治三十七年某月某日、陸軍一世の智囊兒玉將軍は、旅順の攻撃進捗せず、終夜轉輾し

て眠成らざる翌朝、營庭に邂逅したる大山將軍が、無雜作に戎衣に捲きつけたる白縮緬の太い兵古帯、ブチ込んだる無反の一刀姿で、開口一番、

「兒玉どん、今日はどこかに戦争でもござす。歎頻りにボン／＼音がします喃」

とやつた、滿洲軍總司令官のこの悠々閑々、何處に吹く風ありやの膽斗の如き大度量、追の兒玉將軍も翻然悟る所あり、捉はれたる策戰に更に時を點じ、ステツセルをして三萬の城兵を率ゐて降らしめ、遂に奉天をも落城せしむるに至つたのは、佳なり有名な話であります。

三軍を叱咤する將の上に、なほ將としての器もある。茲に人間學の妙諦は存します。

一話の鈞量

大正七年三月某日、長崎の富豪岡部某氏が、東亞タルクを計畫し、資本金一百万圓を提けて之が専務重役を物色しつゝあるを、當年の快漢桑田豐藏氏（故人、鳥取縣人）が、岡安さんを推薦し、築地の旗亭に三人相會同して話が纏り、早速其翌日滿洲に發足することゝ

なつた。門邊に出でよから、小聲に囁く二人の問答が面白い。

「おいッタルクつて何だい」

「俺も知らん。行つて見りや解るだらう」

互に許した男子の感ずる意気は、男を見込んで自分を推薦して呉れたんだ、といふ覺悟。自分の推薦を容れて信じて呉れたんだ、といふ信念。そこには肝腎要めの仕事の内容などは、どうでも宜いことになります。

綿密に周到に精緻を極めた設計と企畫とが、必ずしも成功するとは限らない。結果に懼ぢたり取越苦勞に悩んだりした處で、出来ない事はつまり出来ないに了る。世事の成敗利鈍は、必ずしも事前、遺漏なき畫策のみによつて極りません。

成敗と利鈍

然し、東亞タルクの専務取締役として、岡安さんは失敗した。滿鐵から張作霖を通じて買つて貰つた折角のタルク鐵の探掘も、機械の設備と資金の缺乏とから、美事失敗したの

であります。

尤、其頃の岡安さんは、英語の辭書を引ばつて見て、タルク (Talc) とは、はア滑石の事かと頷くよりも、滿鐵の調査課長の手許で、充分タルクに關する専門的の智識を詰め込んだのだが、奈何せん當時の日本の富力は、亞米利加に一臺限りしかない精巧の機械を買ひ占むる能はず、手を拱いて失敗に觀念の眼を閉づるのみでありました。

事業の適否

酔つ拂ひの二人が、ガラになく酒樽を擔いで金儲けを目論見、客の來る前にスツカリ空つほにしたといふ笑話はあるが、此人と桑田氏との交遊の關係大略之に類し、兩々の肝膽相照らしたものである。二十五六年の後半生を北京に豪華な生活を送つた桑田氏は、當世有り觸れた利權漁りをしないため、外務省や三菱系邊りからは勿論、支那の大官富豪にまで信頼されて、國事に盡瘁した隠れたる士であり、これが一面、岡安さんの人格を窺ひ得る俤ともなります。

當代の世相に超越する岡安さんには、随分飛び放れた逸話もある。曾て電車中拘摸の現行犯を引つ捕へ、之を警察まで曳きづつて行つたは宜いが、あまり取り調べに手間が掛つて、面倒臭いに閉口してゐる内、何時の間にもやら、自分の盗まれた財布が、ポケットに舞ひ戻されて居て、却てその拘摸から痰阿を利られて驚いた。杯といふ奇談もあります。

岡安さんは、埼玉縣比企郡の産。門司の九鐵から、日清生命、國際生命に樞要の地位を占め、現に片倉生命副支配人の一椅子に安んじてゐるが、可惜此人政界に志あらば、疾くに名譽を馳せ得たでありませう。

二六、折花攀柳の趣味を解せぬ原邦造氏

恩賜の時計

第一百銀行の創立者にして大株主たる原六郎氏は、舊友京都府尹北垣國道、姻戚同志社々長原田助の諸氏に託して、愛娘のため婚選みをするのでありました。

この白羽の矢が立つて、原家に養子となつたのが本文の原さんで、京都帝國大學法科の秀才として、恩賜の銀時計を贏ち得た光榮と共に、天下の富豪原家に惘望されて、その舊性を捨てることになりました。

原家の姻戚に大和の土倉家があり此先代は、夙に人材の養成に意を致し、當代知名の士にして、土倉家の世話になつた者尠からず、従て人材を見抜く土倉家の鑑識は、原さんの今日あるに、與つて力ありしものと想ひます。

家庭の圓滿

三國一の婚がねとして原さんの、品行方正なのに不思議はないが、金持ちの實業家に有り勝ちの放恣的遊樂に一向趣味なく、書畫骨董類に悠閑の氣を散ずる外は、時にたま〜帝展や芝居に出掛くる際も、必ず夫人同伴の睦しさを示し、眞に琴瑟相和する圓滿であります。

然し單に、養子先きの夫妻圓滿だけのものなら、世に一向に珍らしくなく、小糠三合有

てば、以て養子に行くを厭ふべきを、原家に人となつたと否とを問はず、原さんには別に事業の方面に材幹の凡ならざるものあり、却て財閥を背景として、愈々手腕の冴えがあつて、更に人格の閃きを顯すのであります。

明晰の頭腦と直截透徹の思慮と、温良至醇の心事とは、關係の事業方面に、着々見るべき實績を擧げ、此場合小糠三合の誘は、敢て當て簀らないのであります。

人格と手腕

原さんが、事業界に手を染めたのは、第百銀行を基礎とする高砂生命の、社長となつたことに初る。高砂生命關係の興業會社其他、諸多の事業に責任者たる此人が、岳父に代つて池田謙三氏の後見役とし相談役としての第百銀行に於ては、どこ迄も池田氏の面目を立て、第百と云へば池田氏を聯想するまでに、自己を没了して椽の下の方持に甘んじた所に、氣宇の小ならざるを發見します。

大正十二年の大震災後、第百の池田頭取は、銀行の前途と自家の罹災に氣を腐らしつゝ、

他界したが、其後を襲いた原さんは、海千河千の池田氏の迹始末を引き受けて些の動きを見せず、やがて電光石火的に愛國生命を買收して、第百と高砂との基礎の安固を策し、ここに銀行業者としても、保險業者としても、世人から危惧の念を一掃して、手腕の妙を發揮するのであります。

故舊の情誼

内に家庭の人として、外に事業の人として定評ある原さんは、其一面非常に故舊の情誼に厚く、社員の採用と解職とを日常茶飯事と心得るが如き保險業界に於て、友人故舊を關係會社に配置して、各々自由の才能に働かしめ、一たび其地位に任じた以上は、輕々に解職することなく、飽くまで温情を以て人を待つのがあり、學問の蘊蓄と人格の發露とを渾然融合せしめて、以て事業を進めて行く上には、京都帝大の教授哮喘道博士を専務に招聘したに徴しても、其半面が解ります。

道途傳ふる所に依れば、富豪三井は、高砂生命に垂涎三尺の態であるが、然し社會的の

面目を維持するためには、たとへ三井が一千萬圓の巨費を投げ出しても、カネ故には會社を賣らないのだと、覺悟を極めて居るらしいのです。

第百銀行の傷痍癒え、愛國生命の合併によつて高砂生命の社基安固を加ふる今日、折花琴柳の趣味を解せぬ風格は、以て稱揚に値します。

二七、大自然と同化した全靈の尾崎秀雄氏

托鉢の生活

尾崎さんは、東洋生命の契約課長であり、朝鮮火災の支配人であつた人、明治十八年鳥取市の法律家に生れ、第一高等學校から東京帝國大學を卒つた法學士であります。

大正十二年、翻然保險國を去つて無一物となり、京都一燈園に至つて托鉢の生活に入り、それから京都の常照寺、兵庫の須磨寺、小濱の常高等に寺男として住み込み、最後に昨年夏、讃岐小豆島南郷庵に移つて、復、門外に出でず、大正十五年四月、島の漁師夫妻

の手に抱かれ、四十二歳を一期とし、大空放哉居士の戒名を残して逝つた。保險界の生んだ稀有の一奇才であります。

寺男の生活

一高以來の親友たる萩原井泉水子は、「彼が朝鮮火災保險會社の支配人となつて彼地にわたり、突然、やめるやうになつたまでの事情を私は好く知らない。彼はたゞ、自分の「馬鹿正直」の爲めだといつてゐる。兎も角、彼は非常な決心をしたので、一燈園に飛込んで來た時は、彼は、其妻君さへも、どこかへ振り捨て、來て、全く無一物の放哉だつたのである。彼が俳句に復活し、又、彼の俳句が光つて來たのは、それからの事である」と書いて居ります。

尾崎さんの東洋生命時代に、俳句の同人達が遊びに行くと、句の話などよりも、まあ一杯飲めといふ風で、いつも長火鉢の前にトグロを巻いて、盃を手から離した事はない。而して妻君が非常なハデ好きで、女中を二人も使つて、朝から風呂を立て、居たといふ前生

活を捨て、紺の筒袖を着て漬物桶を洗ふ寺男生活に急轉した心状は、一體何を物語るの
でありませう歟。

俳句の同人

「然し、死といふ事に對しては、彼は平氣であつた。彼は死に面しての恐怖や不安を感じてゐなかつた。彼には一人の係累もなく、又、我を執すべき仕事もなく、眞に無一物の境涯にある放哉であつて、天空のやうにカラリとした氣持にすわつてゐたのであつた。小豆島に渡つてからの彼は、物質といふべきものゝ何一つも持たなかつた。着る物などは私達から送つた。食べる物は一二から送つて貰ふやうに私は頼んだ。住すべき庵は立々子の恵む所である。彼の日常に入用な雜品は、後援會から送つたのもあるし、同人諸君のうちから、個人的にすゐん送られてゐたらしい。彼は自分の欲しい物があると、遠慮なく夫々に所望する、而して恵まれたる自分を、自分で喜んでゐたのである」と、井泉水子は書いて居ります。

物質と精神

尾崎さんの小豆島の庵居生活は、かくて不自由といへば不自由であつたらうが、そこに悠々自適して、入庵以來我が死所を得たりといふ氣持ちで、物質的には貧しく淋しかつたやうだが、精神的にはすつかり満足しきつて居たとあります。「彼ほど眞劍に句作したものはなく、彼ほど其生命を俳句にやきつけたものはない。」と激賞される代表句は、次のやうなものでありました。

こんな好い月を一人で見ても寝る
 翌は元日が来る佛とわたくし
 漬物桶に鹽ふれと母は産んだか
 大空のました帽子かぶらず
 入れ物はない兩手でうける
 肉が瘦せて来る太い骨である

二八、保険政策より臺灣統治を見る益子逞輔氏

漁夫の利得

益子さんは、大成火災の常務取締役である。その本店を臺灣に有つおかげで、東京市内に大した契約高もなく、従て何が幸になるか解らぬ大正十二年の、あの關東地方の大震火災に際し、同業の他會社に率先して、保険金の一割支拂を聲明し、一舉にして大成火災の存在を鮮明ならしめ、この一割支拂が江戸ツ子の人氣を呼んで、爾來其まゝ火災保險聯合協會の圏外にあり、諸他の會社が、協定勵行や料率嚴守に苦しむ間を、大に遺利を拾つて漁夫の利を占め、同業からは一様に火事泥式に見られて居るのが、その大成火災で、その主腦がこの此人なのであります。

政治と生治

今の日本は、漸く眞實の議會政治に入らんとし、漸く眞正の政黨政治に入らんとしてゐる。これ府縣知事の民選が、眞面目に論議せらるゝ所以である。是に於て官僚だけの政治では陳腐であり、外務省だけの外交では、既に舊套に屬する。國民は須らく覺醒し、陳腐な官僚政治を捨て、國民自身政治生活に浸らねばならぬ。舊套の外務省外交を脱して、自身國民外交の眞髓に觸れねばならぬ。

従て殖民地の統治に就ても、徒らに總督府や其他の役人に、爲すがまゝに委して置くべきでない。どうしても國民自身の統治に出でねばならぬ。これが臺灣統治の根本義であり、日本國是の根幹である。此意味に於て、臺灣銀行頭取たりし故柳生一義氏や、門野重九郎氏等の唱導により、専ら臺灣の神精富豪を網羅して出來上つたのが此會社である。と益子さんは語ります。

努力と矛盾

其方面の諒解を得て創立された大成火災は、單に保險事業にのみ執着して暮進し行くべきでなく、臺灣の關係を考慮して、そこに努力と矛盾の一面があり、殖民政策の上からすれば、單にこの會社を大にして、利益を増進するばかりが眼目ではない。やがて蓬萊島の富源を地盤とする營業方針が発見されねばならない。純真なる島民を啓發指導すべく、別に有意義の地位と存在とを閉却することは出来ない。仍て會社の利益増進以外、眼中國家なく國民なきがあり、株主の利益配當以外、保險の眞意義を度外に措くある内地會社に伍して、たゞ單純に協定規約によつてのみ、提携して行けない理由が存するのである。此難關を突破してこそ、此會社が社名通り大成する所以で、其間、相當苦心もあり努力もある。「原錦吾氏を顧問として苛められて來た關係で、市内契約の密集逃避には、一方ならぬ注意を致し、保險料率の如きも亦、必ずしも安いばかりを標榜しては居りません」といふのが、敢て勝てる見込がなければ喧嘩をしない、といふ流儀の益子さんの言葉でありました。

立志の學僕

茨城縣久慈郡に産れ、高田早苗博士の紹介で嘉納治五郎氏に知られ、宏文學院の學僕を勤むる傍、早稻田に通學して、明治四十一年大學部の政學科を卒り、兵役を終つて渡臺し、臺灣日々新聞に在職五年の後、歐洲戰爭中に歐米を視察し來つて、歸朝匆匆計畫したのが、その大成火災でありました。

主務官廳に申請して内地の開業を出願し、二ヶ年半の歳月を費して漸く認可を得たのが、實に震災前年の春であつたと云ひます。

「學校を出て宇都宮に軍隊生活を終つて、加納先生の所にゴロ／＼してゐる時に、臺灣の某新聞社で一年に六回も昇級させるが、どうだ行かないかと誘惑されて、それが私の臺灣で仕事をする動機となりました。私は其當時、關西方面の大商店の番頭になりたい念願でありましたが、逸れれば逸れるものですね」と用心深か相に、益子さんは笑ふのでありました。

二九、役人生活廿年の經歷を有つ塚本明篤氏^{アキカズ}

素朴の人格

塚本さんは、横濱生命の總支配人である。毎日々々、東京から横濱の本社へ通勤されるので、朝早く何はねば御目にかゝれないため、田舎住ひの私は、酷暑の或る朝四時半騒起、五時半の一番汽車に乗込み、今起きて顔を洗つてゐる交番の巡查に、道を尋ねて本郷淺嘉町に至り塚本さんの門を叩いた。幸ひにして前日の電話により、待ち受けてゐる所でありました。

追に二十年の、役人生活を續けられただけに、素朴の住居、簡易の起臥、そゞろに其の人となりが偲ばれます。

募集の時期

話は、此間旅行した東北及北海道方面の題材からして初まる。すべて保険募集の眞隨は、

其土地其土地によつて時期があり、自ら定まつた機会がある。東北の林檎、北海道の漁業等の收穫奈何は、やがて之が標準となる。此意味からすれば、特定の限られたる小天地に、同業小競合ひの掠奪募集などの愚は演ぜらるべき筈のものでない。未開拓の天地は濶い、各地の特種事情を研究して掛るなら、決して同業相咬み合ふ如き醜は、避け得らるゝ筈であらう。「私は其土地の特種事情の研究と共に、會社營業の狀態と方針につき、徹底的に代理店主と相談することにして居ります」と露骨に告白します。

三年前、仙臺に東北代理店後援會といふものが出来て、一切を擧げて自治的施設の下に、横濱生命のために挺身努力の功績あり、逐次小樽及關西方面にも、自發的に此種の發會を見る。と悦びながら語り續けます。

募集の前提

横濱生命の代理店會は、單り横濱生命の募集検討の一機關たるに止らず、實は會員相互の商取引上に、彼此の有無相通する所に妙味の存するものがある。同業の競争激甚を加ふ

るとき、較もすれば同業に對して中傷譏誣の聲を放つものある時、眞に會社の分身たる氣持ちで、代理店の結束を見得るは、實に泪ぐましい感がある。と語つて、「私は、何事に拘らず不言實行を主といたします。乃ち保険金の速時拂ひの如きは、敢て自家廣告をしなくとも、敢て代償契約の交換條件を出さずとも、そこに自然の反應あり自然の應報があると信じて居ます。従て私は、保険料の安い高い、利益配當金の多い寡いなどは、此場合大した問題でないと思ひます。折角好餌を以て契約者を釣り得たにしても、若し保険金支拂時に際して怨嗟の聲を聞くあらば、以て千仞の功も一簣に缺くではありませんか」と説き、昨年の九月から支店長の權限を擴大し、其所管内營業に對し自由裁量制を採りたる効果の、妙からざるものあるを話すのであります。

白紙の態度

明治二十六年、獨逸協會専門部法律經濟科を卒つて官界に入り、當年の農商務省以來、工務局に恪勤精勵の事績を擧げ、工業監督官より保險國に入り來つたのは、大正十四年の

七月でありました。

曾て大正三年から五年にかけて、官命を帯びて米國及加奈陀を視察し來り、同十年から十一年にかけて、ゼネープの第四回勞働會議に出席した塚本さんは、勞働問題に對する専門家であり、健康保險法や工場法の編制に、與つて没すべからざる功があります。

保險事業に蒞むや、全く白紙主義の態度を以てし、保險金即時拂制決行に就ては、本社直屬の下に生存調査の機關を設け、支店長の權限擴張と共に、第一線に立つ外務社員のためには、從來の待遇を改善して、自らなる品位を高むるに努むるなど、施設の着々見るべきものがあるのであります。

追記 塚本さんは、其後聘せられて太平生命の、事務重役に榮進しました。

三〇、日本山岳會の先覺者河合良成氏

自然の神秘

近時、運動熱の勃興と共に、山岳登攀の流行は一般の風潮を醸し、若きも老いたるも高きも卑しきも、男と云はず女と云はず、幽邃なる自然美を讃仰し、神秘なる山岳美に驚異の眼を睜る。そこに前人未到の境地に、雄大なる自然の懐を探り得たらん心境は、眞に五尺の小軀を以て、無限の大字宙に同化するの慨がある。平地に齷齪して極小利害に執着するの妄念は、以て散じ得るでありませう。

日華生命の常務取締役にして、萬歳生命の専務取締役たる河合さんが、あの瀟洒な風貌を以て、日本の山岳通であり、疾く學生時代に於て、北アルプス劔岳の絶頂を究めて、「長次郎谷」「熊の岩」などの名づけ親であるとは、嘘のやうな眞個の話であります。

家庭の和樂

今から十六七年も前に、早く山岳通を以て任じた河合さんが、他の運動競技にも一通りの興味を持ち、今日尙ラケット握る腕の冴えを示すといふも、強ち想像に難くはない。スポーツマンシップ特有の快活と氣品とは、一見之を看取する事が出来ます。

行くとして佳ならざるなき多方面の趣味の内、高山植物の栽培は、實に此人の隠れたる道樂であつて、灼熱の或る朝、私と對座する郵船ビルの六階に、四邊の蔓を見下ろしながら、その愛好の丹精を話すのであります。

令弟は川崎銀行の専務重役であり、令閨は桑田博士の愛娘であるが、三男二女の子福者として、健やかなる慈父母と團樂する家庭生活は、そこに恵まれたる果報と、文字通り理想的の環境と、誠に健美に耐へないものがあります。

米價の調節

河合さんは富山縣の産。明治四十四年東京帝國大學政治科を優秀なる成績で卒業し、當年の農商省省に書記官として、米價の調節に工場法の編制に蠶糸の救済に、天資の英才を惜し氣もなく發揮したのであるが、國家刀筆の吏として、一向に官僚の臭味もなければ、俗吏の忌味もない所に、爲すあるべき多大の人間味が横溢して居るのであります。

大正八年仲小路農相は、その提けて起ちたる米價調節の案に蹉跌し、遂に桂冠すること

になつたが、此時共に野に下つて、取引所の理事となり、郷男爵と共に取引所の廓清に志し、其功没すべからざるものあり、川崎家の指を保険事業に染むるに當つて、遂に保険國人となつたのが、大正十五年の一月でありました。

良貨の廉賣

「保険界に這入つた以上は、眞に一意誠心、畢生の事業として保険のために努めたい」と堅い決心を語る河合さんは、良貨の廉賣を標榜して、どうせ競争して行くのなら、花々しく競争場裡に立つて行かう。「安からう悪からう」では不可ない。安くして而して良いものでなくてはならぬ。此意味から萬歳生命に於ては、日本一の安價なる保険料を算出して、近く之を實施すると言ひます。

「相互組織は、餘りにデモクラチック過ぎる。それが相互組織の特徴にして、而かもこの組織から生れ出づる悩みも、そこに胚胎するものだ」と説き、相互組織の實質をとつて、株式會社の缺陷を補はんとするのが理想である。一週一回帝大經濟學部に、取引所論を講

述する河合さんは、斯學唯一の權威者でありました。

三二、夫子独自の信條に終始する石坂泰三氏

震災の記念

大正十五年九月一日午前十一時五十八分、悲絶慘絶の大震災を記念するため第一相互館に於ては、全館を通じて防火消防の演習を行ひ、錠戸の窓を閉ざすに一分を要せず、全演習を了するに十分を出でざりしと、當日にのみ限られた固いパンを嚼る稻宮庶務課長の話を聞きながら、石坂さんの室に通ると、「どうも、あの記念すべき震災の時刻に、笛の吹き方が段々少くなるとは怪しからんことだ」と獨語してゐる所であつた。石坂さんは、第一生命の取締役兼支配人であります。

契約の掠奪

生命保険界に於ける掠奪募集の問題は、頻りに第一生命を中心として話題に上つて居る

が、然し第一生命は、斯界激烈なる競争場裡に起つべく初めから、ハンヂキャップをかぶせられてゐる觀がある。全国各地に一の代理店を有たないことがそれでありませう。

各地方各町村の各社火花を散らす第一線の激闘は、其地々々の代理店相互の混戦であり、亂闘であり、錯綜紛雜したものである。何となればその各社を代表しつゝある代理店引受者は、其土地に於ける親戚關係、黨派關係、縁故關係等から、それ〴〵契約者を勧誘募集してゐる。假りに其間、掠奪募集の一つ二つが發覺した所で、土地の者同士の顔馴染から宜い加減な妥協や調停が成立し得る。が其地に代理店を有たざる第一生命は、單に掠奪されるだけであつて、假りに善意の新契約者を他社から乗り替へさせても、直ちに奪還されて了ふ。而かも悪口のつかれつ放しであり、之を辯解して呉れる代理店がないのだ。これに就て、「私には纏つた意見も感想もありません。私は唯、與へられた仕事を、兀々やつて行くだけです。」と石坂さんは、いへもなく口を噤んで居ります。

隱忍と努力

矢野社長の留守中、貧乏搖ぎもさせない此人が、「日記をつけたことはない。小使帳一つつけたこともない」と極めて茫漠に踏晦せんとすれども、剛健の氣象は活達の眉宇に閃き社長の信頼に對しては、「この仕事以外には、先生の生命はない筈だ」とすべてを見通してたゞ陰の人として大世帯を切り盛りする所に、得易からざる隱忍が見られる。單に今日の聲望と地位とに羨望の眼を向くるは中らない。三千萬圓の契約高から、現在の三億五千萬圓を贏ち得るまで、いかに人知れぬ苦心と努力とを拂つたことだらう。宗教的の信念にあらず哲學的の歸結にあらず、而して論理的の結論にあらず、眞に獨自の堅い信條を抱いて居るのであります。

積善の餘慶

石坂さんは、明治四十四年東京帝國大學獨法科を卒り、直ちに遞信着に入つて四年間役人生活をなし、其貯金課長の椅子を去つて、第一生命の秘書として保險國人となつたのは大正四年であり、翌年六月英米視察の途について、支配人の要職を占めたのは大正七年で

あつた。原籍は埼玉縣だがチャキ／＼の江戸ツ子で、一中から一高に入つた當時はボートにあれボールにあれ、擊劍、柔道すべての方面に、一高が覇を稱へた時代で、新井源水君等と共に柔道に鍛え上げた石坂さんの筋骨は、隆々として其巨軀を盛り上げて居ります。

七十六歳の父君と六十八歳の母君と、八人の兄弟中の三人目に生れた此人が、二男二女を儲けて、その骨肉分身中、一人の缺けた者のない芽出度さは、眞に積善の餘慶でありませう。

三三二、失意裡に晩年の幕を閉ぢた田中小太郎氏

深刺の意氣

田中さんは、元、日清生命の支配人でありました。

大隈侯爵の創設した日清生命、早稻田大學を基礎とする日清生命、といふ二大看板を提けて、久保、高柳、島田氏等募集部の俊材と共に、沖、小山、道祖土などいふ當時の荒武

者を追ひ廻はして東西に馳驅し、南船北馬席の暖まらざる活動をした。假令それが科學的にして組織的なる今日の募集方法から見れば、いかにも陳腐にして舊套に屬するものありとしても、時あつて夜を徹して痛飲し、氣鋭の少壯連に伍して柳暗の巷に豪快の氣を吐いたは、畢竟意氣の潑刺たるのであつた。其人が、卒然として逝つたのであります。

大正十五年九月七日の朝、法師蟬喧しく鳴く阿佐ヶ谷の僑居に、含嗽洗顔中に仆れたのであります。

數奇の運命

大正七年、日清生命を出た田中さんは、日章信託の専務重役となり、専ら早稻田系姉妹會社の金融機關を以て任じ、畢生の力を信託事業に注ぐ事になりました。

數奇なる運命は、其間夫人に先立たれ、次で二百萬の資金を擁する日章信託が、經濟界の大瓦落に影響を受けて、投資の回收困難を致し、やがては日章火災の監査役をも抛ち、一切の公職を犠牲にして之が挽回に努めつゝ、再起を計つたが時運來らず、遂に永樂信用

組合の専務理事たる名に隠れて、其まゝ不歸の客となつた。享年五十七歳であります。夫人逝いて七年、淺草橋場の同じ寺に、告別式に参列した知友の誰彼は、至誠院本光自照居士の位碑を仰ぎつゝ、蕭條たる秋の風に轉た人生の儚さを、飽かず語り合ふのであります。

中京の名物

日清生命に、保険國人たる以前の田中さんは、名古屋に日本車輛會社に在つて、小山松壽、原田勲七郎、熊谷常光、永田金三郎の四氏と共に、中京社交界の五人男として、號名又は粹名を諱はれたもので、「當年の五人男も、一人逝き二人没して、とう／＼俺一人になつちまつた」と、今は農林政務次官の小山氏が、撫然として眼を瞬いて居りました。

秋田藩に生れて、今の佐竹侯の幼年時代に、藩邸の書生部屋に勉學の苦を積んで、町田忠治、大繩久雄、田中隆三氏等先輩の認むる所となり、日本車輛の前に藤田組に入つて、傳三郎翁の知遇を得たるが如き、偏に、情誼に厚く信義に悖らざる性行が、頓て當年の一

寒措大をして、大に驥足を展ばしむる因をなしたのであり、奇才縱横たる外に燃ゆるが如き正義の觀念を、深く藏して居るのであります。

恩愛の羅絆

財政難と物質苦に逢遭した晩年の田中さんは、好める讀書と書畫に没頭し、漢學仕込の道義に堅い頭腦も、近代思想の理解に努めた最近に於ては、令息達の抱ける文化の新智識に達觀の眼を開き、一個の好々爺として家人に臨み、八十幾歳の頽齡の母堂に仕へて、至孝到らざるなかりしといふ。

長男國夫君は、大阪に關西信託にあり、次男忠夫君は、他家に入つて京都帝大を出で、三男信夫君は、單り修學中家を守る。何れも秀才揃ひで、肅然として参列の人々に會釋した光景は、誠に泪ぐましいものがある。「父も曾ては大隈内閣時代に、郷里から政界に打つて出やうなぞの野心もあつた様だが、今は何も一場の夢となりました。」と、暗然として國夫君が語ります。

新時代の階級意識に目醒めた田中さんに、天藉すに尙暫らくの齡を以てせば、再起活躍の舞臺が、自ら開かれ得たでもありませんたらう、可惜。

三三三、五十餘の公職肩書を有つ神田鑄藏氏

兜町の三藏

東華生命の實權者たる神田さんは、財界の大立物として、夙に其名聲を内外に馳せてゐるが、由來株界の事象は、端倪すべからざるものあり、特にその閱歴は、以て研究に値します。

日露戦争後の反動時代に於て、金融緩漫の時期に於て、政府は公債の整理を目論見、東西の大銀行十七個を網羅してシンヂケートを組織し、その引受によつて、第一回四分利公債一億圓の發行をなすこととなつたに對し、同じ公債ブローカーたる小池國三及福島浪藏の二藏を語らひ、所謂兜町の三藏が一團となつて策動し、仍て五百萬圓の再引受を許され

た神田さんは、一手に千五百萬圓の申込を取扱つたといふ。そこに俊敏逸すべからざる商機を、捉へ得る妙諦が発見されます。

一轉と再起

一口に株屋と輕視された時代に於て、天下の銀行團を向ふに廻はして、相共に公債市場に馳驅するの端緒を得るに至つた此人も、名古屋の株界にあつて、日清戦争後の株式熱狂時に乗じては、巨萬の富を獲得して揚々たる意氣を示したが、俄然訪れかゝつた反動に攫はれて、郷里は元より中京の天地にも居たゝまらず、臆然として東京に逃れ來つたと謂はれます。

千載の恨みを残して名古屋を出で、日本橋蠣殻町の炭屋の二階に轉り込んだのは、明治三十二年極月の霜寒き時で、奪然再起、坂本町角に紅葉屋商店を開き、公債取引に主力を注いで朝早くから夜遅くまで、冷飯草履を穿いて一意専念事業に邁進し、其間の努力と苦心とが酬ひられて、漸く身邊に同情者も出來、着々財界の認むる所となつて、遂に明治三

十五年には、整理公債と軍事公債とを合せて、七百萬圓を買得するに至りました。

公債の輸出

明治三十七年日露の戦端開かれて、旅順の陥落に次て奉天の大勝あり、我國威が世界に發揚せられてより、帝國公債に對する照會の、頻々として海外から致さるゝを、一々英文のレポートを以て之に答へた紅葉屋商會は、三十八年から九年の春にかけて、一手五千萬圓の各種公債を外國に輸出し、公債輸出の新紀元を作ると共に、日露戦争の勝利に對して資力的貢獻をなしたる記念のため、牛込砂土原町の自邸に大々的の園遊會を開き、内外財界の名士二百餘名を招いて盛宴を張り、國債輸出外資輸入の祝賀の席上、大隈侯爵や遊澤子爵の感謝演説があり、流石の神田さんも、近く其六年前には、僅々一百圓の資本を抱いて創めたに過ぎなかつた苦闘の跡を顧みて、今更、感慨無量の追憶に打たれたことでありませう。

英文に和文に、紅葉屋日報を公刊して、日本に於ける有價證券現物價格表の嚆矢となし

日本公債を政府の裏書保證なく輸出せしむる動因を作つた功は、決して没すべからざるものがあります。

保険の經營

神田さんは愛知縣須成村の、邸前大楓樹あつて、里人之を呼んで紅葉屋と稱する代々酒造を業とする家に生れ、十七歳の頃までは、酒泉の地攝津の灘に出かけて身を奴僕の間投じ、三年間は酒造改善の實驗に没頭したこともあつたが、其まゝに日を消せば、海東郡酒造組合頭取位を贏ち得るに止まり、結局は、國家的に我邦金融界及證券界の飛將軍たる今日を見ることは出来なかつたでもありません。

「保険事業には、一向力を入れませんが……實は保険事業に對しては、私のお得意様だといふ頭で居りますので……」と語り、折から復興局の清野長官の、告別式に參列するといふので、フロックコートに喪章をつけて、出で去つた神田銀行の頭取室には、神田さんの有する公職や、肩書を書いた五十餘枚の札が掲げてあるを見ました。

附記 其後神田さんは、神田銀行閉鎖の騒ぎに會したのであります。

三四、労働重役を以て自ら任ずる木村雄次氏

一路の突進

東洋生命の社長木村さんに御目に掛る前、新井秘書の話に「私の會社で一番能く働くのは社長です。朝の九時から夕四時過ぎ迄仕事に没頭して居ます。私の會社で一番會社の智識に明るいのは社長です。各部署係々の觀察は、畢竟局部的に偏します。私の會社で一番精力の旺盛なのは社長です。殆んど病氣らしい病氣をした経験がありません。然し他の方面から見て横溢の稚氣があります。あの童顔が之を證明します。同時に滿々の茶氣があります。あの笑顔が之を證明します。而して斷乎たる所信の決行があります。あの偽らざる眼眸が之を證明します」と聞かされた私は圖らずも、議會に飛行機に乗つて行き、反對黨人にヒマシ油を吞ませ、而かも爆弾に覗はるゝ毎に、益々人氣を高めて居る彼の、伊太利

黒褌衣宰相の、ムツソリニを思ひ浮べるのであります。

職業の本義

東洋生命の株値の漸騰に對して、いかなる經營方針が爾く會社の堅實味を齎らしたかを眞面目に質問した或る株屋の店員に向つて、「君は株屋根性を離れて株屋商賣を眺め得る餘裕があるかい。株屋根性からすれば、株値の上り相な株を買ひ占めて、充分利を見た上にも尙利鞘を目論見るやうだが、株屋本來の機能は少額の手數料に甘んじて、顧客の便利に資する點にある。生き馬の眼を抜く人の其活眼をも、敢て抜かんとする底の利慾に眩んで遂に株式業者の破産と倒産とが来るのだ。私の保險會社經營法は、唯、保險本來の根本義に基づくだけで、他に旨い仕事を求むるのでもなく、徒らに融通資本収益の多きのみを欲するのでもない。眞に相互扶助の本義に則つて契約者本位に進むだけだ。其間何等の特色もなければ異色もない。」と木村さんが説破した相で、左顧右眄せずして其向ふ目的に突進する點に、躍如たる面目を見るのであります。

木村さんは、明治三十二年に東京帝大の法科を出て第一銀行に入り、三十七年京城の支店に行き、四十二年韓國銀行創立に當つて之が理事となり營業局長となり、遂に朝鮮銀行理事として大正九年に内地に引き上げるまで、佳なり永い朝鮮との交渉は、從て滿洲對策の奈何が日本の安危に關するものあり、滿鮮の實地踏査を経ずして、日本の國政を論ずる資格なしとの堅い信條を持するに至り、朝鮮の統治に就て傾聽すべき卓見を有つのであります。

「朝鮮滿洲を捨て、日本の獨立は確保されません。今や滿洲は、日本に取つて國民生存の絶對條件である。滿洲のない日本は、忽ち饑餓に瀕する。日本人のためにバターやチーズの効用ある味噌、醤油、豆腐等も、滿洲なしには得られません。」

一方、朝鮮新附の民衆も、日本によつて以て生活が保證され、財産の安固があるのだから少數不逞の徒が現はれた所で、決して問題とするに足りません」と此人は語ります。

放任の教育

曾て高等學校時代に、柔道の初段級に進んだ骨格と、圍碁に初段の實力ある趣好とは、自ら高邁の氣象と活達の元氣とを、其眉宇に窺ひ得るが、一男五女の子福者で、「どうも性分と云ふものでせう。子女の教育に就ては全く放任主義を採つて居ります。家庭の事まで考慮する餘裕がないので……新聞を讀んでも保險といふ文字が眼につくので……」と人の父としての、慈愛の深い笑みを洩らします。

「露骨に謂へば、私は寧ろ其日暮しの方針です。断えずベターからベターに歩みを進めて居るに過ぎない。」と語る此人の話材は、政黨方面から世相問題に移り、慊らざる現代の諸事象にまで迫るのであります。

三五、律義主義を以て邁進する橋本萬右衛門氏

率直の態度

支部長會議第一日の晝餉時、忙がしき十數分間を狙つて待つた私は、惶たゞしく應接間に通されて、片隅に押しつけられたる小卓を、自ら私の前に運び來り、其卓上の塵をボケツトから懐紙を出して丁寧に拭ひ清めて、私に對座した其人が、大安生命の新任社長橋本さんであるを知り、先づ率直と眞摯其まゝの人格を、發見するのでありました。

曾て徳川將軍家御納戸御用達をした江戸の藪屋と、血縁の關係上から之を引受けて國元の眞綿を回送することになり、交通運輸機關の發達は、更に進んで木綿々に迄手を擴ぐることになり、從て之に關聯して紡績事業に指を染むることゝなつたのであります。

一貫の直實

名古屋紡績に社長たる橋本さんは、其前社長時代の衰運を挽回して、誠實と熱心とを以て經營の難關を突破した。この勇往邁進の氣象を見込んで今次、大安生命が實權者とし社長として、迎へた理由は容易に領き得る。「名古屋紡績の如きは、何か大に手腕を發揮したといふよりも結果から見て、たゞ私の直實な經營方針が、良い成績を生んだのに止まりま

す。何事業に拘らず、着實を以て貫き得ないものはないと考へます。」と謙抑の裡にも、固き自信の口吻あり、郷里福島縣を中心として銀行、水電、信託、電力、カーバイト、電爐工業、化學工業、肥料等の、各種事業に關係する此人の、營業方針の一端が窺ひ知らるゝのであります。

電氣と保險

電氣事業は、各地方各縣下に於て自ら動力の供給範圍が限られてゐる。が、保險事業の營業範圍は全國的なるのみならず、汎く海外にまで手を延ばし得るので、其活動や奔放自在、融通無碍である。殊に支那動亂の影響とか、原棉生産の狀況とか、財界不況の餘波とかいふものによつて、断えず脅かされるゝ紡績事業とは全然異なるありて、其間いかに暢びやかに發展の歩武を進め得るものであらうかと、保險業に多大の興味を感ずることになる。「私は、保險に就て全くの門外漢です。これから幼稚園に這入つて初一年生たるに過ぎないが、唯、被保險者と契約者とに飽くまで親切に、資金の運用に絶対に眞面目を守つて、

而して事業を進めて行くならば、社業經營に對して大過なきだけを信じます。此點に關しては、主務官廳の嚴正なる監督があるので、寧ろ銀行業よりも、一層確實な目標の立ち得るを信じます。」と、決心の片鱗を眉宇に示すのであります。

大安の將來

創業以來、必ずしも順調の歩みを運んだでもない大安生命の、社長を引受くるまでに至つた経路は、有價證券やら銀行預金やら、確實に資産數百萬圓あるを見届け、仍て徳川時代の舊家たる資財を掲げて駭起したのだと謂はれ、時代に相應しき積極的の營業方針に基き、敢て同社のために更生の意氣を吹つ込まんとする橋本さんは、八男二女の子福長者で、長子には父祖の事業を繼がしむる關係上、専ら家庭教育を主眼としたが、他の子女には、それぞれ専門最高の學府に入らしむるのが、教育の方針だと話します。

事業の外に何等の趣味なしと斷言する此人から、私有土地に對する觀念、借地權に對する問題、小作爭議に對する見解等、現代社會に緊要なる地方農村對策の、大いに傾聽に値

する卓見の閃きを見るのであつたが、折から熱田部長の、會議時間を急ぎ立てるに氣が付いて、辭し去るの止むなきを惜みました。

三六、義務觀念に生きんとする久保山武雄氏

禽獸の文化

團體の生活は、畢竟競争の生活である。社會の生存は、畢竟競争の生存である。文運の進歩と共にこの競争と争奪との機運は、隨時に隨所に演ぜられ、その妙からんよりは事端の繁からんことの、寧ろ禽獸の生活に近づきつゝあるを指して、近代文明の進化と稱すべきかに見做される。之を調節し之を緩和するもの、法律の力にあらず命令の力にあらず、ただ各自の反省する徳義に訴へるの外はない。權利を主張するに當り、先づ自家の義務觀念によつて、各事象を省察し來らんとする人は少い。それを東海生命、東洋生命、八千代生命、愛國生命及共保生命の法律顧問たる辨護士法學士久保山さんに發見する。曾ては愛國

生命に東洋生命に、令名を馳せた庶務課長でありました。

義務の觀念

近代の國家は、共和制にしる君主制にしる、各國權利の主張と主體法令の壓迫とが、遂に團體生活の破綻を來たし、露西亞の理想政體も遠く伊太利の黒襖衣政治に及ばない。勞農政府は權利の主張に飽くなきを示し、長靴半島國の政治振りは、各個義務觀念の發露に世界の識者を推服せんとす。其國民の氣風が、靡然として義務の前に覺醒するとき、初めて國運の隆昌を見るであらう。初めて國家の繁榮を見るであらう。露西亞が伊太利の現狀にまで建て直るに非ずんば、到底救はるべきでない。日本現代の世相衰頹し、我三千年來醇朴の氣風は地を掃つて廢滅し、たゞ現前に餓虎の如く、權利の主張と利權や利益の爭奪とのみであるならば、恐るべき國難は瞬間に襲來すべくして、遂に捨收の餘地もなきに至らう。此秋に際し各個人を守るべき信條は、眞に義務にのみ生きんとする觀念である。と主張する此人を以て、普通有り觸れたる法律屋と目することは出来ません。

自治の美果

昨冬、赤坂二級區會議員に立候補したるとき宣言して「(一)現代の權利主張の流行を悲しみます。各人が義務遂行の精神に燃ゆるやうになつて、始めて完全なる自治の美果が實ります。私は、義務の宣傳者を以て任ずる者であります。依て私の立候補は、區會議員の權限を希ふがためにあらずして、實に區會議員の義務を果さんがためであります。大きな問題にも小さな問題にも、たゞ私の義務を盡して、國家と市區とのために働きたいだけであります。(二)それで私は、何れの團體にも屬せず、又其權利を主張し勝ちの、後援者をも運動員をも持ちません。誰に推薦されたでもない。たゞ私は自分の義務だと信じて、今度の立候補を決心したのであります。」と謂つて居る。東京十五區の區會議員が、斯くの如き美はしき心事を以て區政に參與するとき、初めて大東京の市政は、眞乎革正されずには居ないでせう。

忍従の數年

久保山さんは熊本縣天草の産、濟々曇から一高を経て東京帝大獨法を卒つたのが大正二年で、卒業式前疾くも愛國生命に約束済みとなつたが、入社の際の給料は大枚二十金に過ぎなかつた。「電燈會社に這入つても四十圓は取れるぞ、止して下へ」といふ友人の忠告を退けて忍従の數年、やがて獨立自營の臍を堅めて今日ある開業の地盤を築いたもので、民事にまれ刑事にまれ、義務觀念第一によつて訴訟事務を取扱つてゐるといふ。

意地づくになり勝ちの原彼兩造の唾み合ひも、義務觀念の反省によつては、自ら醜き係争の止むものであるとし、相手方權利者から不當に義務を強らるゝ被告事件にのみ、代理辯護を引き受けんとする理想を抱いて法律の民衆化を志し、辯護士を以て特權職業と思惟するが如き謬見を打破するに努むる此人は、ローマンカトリック教の固い信者で、开等の關係から、現に上智大學商科の講座を受け持つて居ります。

三七、人間美を發揮する國務大臣藤澤幾之輔氏

人間の醇味

大正十五年十一月、「保險國人記」に關し、藤澤大臣に面會希望につき、然るべく御配慮願上候」といふ加藤農林大臣秘書官から、菅野商工大臣秘書官への紹介名刺を以て、上二番町の大臣官邸に出向したのは、當の菅野秘書官の出仕前の早朝であつた。無雜作に親しく私に椅子を奨めた藤澤さんは、其日、大藏外務兩省との聯合會議あり、その前後に省議あり、何時には支那某大官と會見の約あり、晝には何の午餐會あり、夜は何の晚餐會あり、逆も緩談數分の餘裕なきこと、而して數分間では希望する話題に觸れられぬこと等、醇情を以て語り再會の日時を指示した。何といふ氣分の宜い几帳面な、而かも人間味の横溢した大臣だらうと、關外に見送つて呉れるに心づき、更に恐縮したのでありました。

疎野と鈍重

世間では片岡前商相を目して、氣障で高慢で老猾で、屁理窟から手足の出たやうな人物となし、藤澤商相を目して疎野粗笨、東夷的の風貌自ら鈍重だとなし、無遠慮に勝手の批

評を試みるのであるが、私の知り得た藤澤さんは、用意周密、遠謀深慮の人格者であつた。多年の政界生活が、期せずして外面一種の踏晦的様式の、爾く取沙汰せらるゝに至つたのだらうと想ひます。

「陪食」と「賜餐」との意義及び區別を、側近者に説明する點など、永い間法律の研究に没頭した關係上からする當然の、法理的の解釋だとは信ぜられない。日常の坐臥進退、そこに侵すべからざる節制と規律とがある。といふことを聞いて居ります。

奇禍と特赦

仙臺藩公の館の師範をして、祿八十貫（八百石の重職）の祖父と、御用人頭（現代の書記官長）たる父とを有つて、元の栗原郡に生れ、お小姓を勤めた此人は、十五歳の時志を立て、函館の英語學校に入り、次で上京して代言人試験に登第したのが、二十一歳の時であつたといふ。當時年少氣鋭、故河野廣中氏等の福島事件には、之が辯護を引き受けた。けでは物足らず、縣令三島通庸の壓制に憤慨して、隣國の誼みを以て會津六郡の生靈の爲

めに、敢て此縣令の罪を數へて告訴を提起し、之に因り官吏侮辱罪に問はれて投獄の厄に遭ひ、幾程もなく憲法發布の特赦で出獄した。是れ頓て政界に雄飛する端緒となり、市會議員縣會議員より縣會議長となり、尋て衆議院議員に當選すること十數回、而して今日の榮冠を贏ち得るに至つた。浮世の錯綜したる因果は、けに顧みて夢なれや。

流雲の純情

孝は至大至高である。頽齡八十八歳の母堂の前に、朝夕あの巨軀を折り屈けて正座、神に對するが如き敬意を致し、毎食、卓を圍むとき、曾て母堂の箸を採る前に、茶碗を持つたことなきを側近の直話に聞いて、私は泪ぐましく感じないでは居られません。

定めし母堂は、一國商相の印綬を常びた藤澤さんよりも、至孝到らざるなき藤澤さんをかばかり最愛しむことでありませう。

自ら野歩士を以て任じ、この藤澤が大臣になつても、何ら新らしい保險政策はない。保險行政政府に這入つても、何ら新機軸を出さない。慣れない仕事を新らしく勉強して、社會

の機運に副つて行くだけだ」と稱するが、頭腦明晰の精力家であるとか、書畫の趣味があるとか、碁は初段に四目で川崎特許局長と伯仲の間にあるとか、將棋はどうとか、晩酌は大抵一本位だとか、开慶ことは、あまりに謂ふところの平凡に過ぎる。藤澤さんの生命は發揮する人間美に存する。此程足利の共進會參列の途次、西田工場を參觀して女工寄宿舎の完備理想的なるに感激し、歸來直ちに一書を揮毫して贈つた杯は、正に慥に好個の其一例でありませう。

附記 藤澤さんは其後野に下り、「おらが内閣」の漬ゆるを、覗んで居るのであります。

三三八、至誠一貫を以て信條とする長松篤柴氏

斷酒の實行

東京火災、帝國海上の副社長として、東洋火災の取締役たる男爵長松さんは、至誠の人である。此程東京火災倫敦代理店視察員たるダンベル氏の來朝に際して、晚餐を俱にした

卓上、同氏が一向に葡萄酒の盃に手を觸れない。どうした事かと訊いて見ると、ホテルで友人と何か賭をして負けたために、今晚の十二時までは、アルコール飲料を呑む譯に行かないのだとの話。一場の冗談事からする賭に對しても、一定時間その義務の履行に、相手方の見る嗜ない知る識らないを問はず、眞面目に率直に無邪氣に、信義を友のために守る英國人の、美はしい一面に敬意を致した。といふ此人の語る話材にも、其面影が偲ばれます。

協定の破壊

損害保險の事業は、時に不測の罹災件數の續出に、いつ何時意外な傷痍を蒙らざるを保し難い。是等の危険に備ふる準備は、平素決して等閑に附し去るべきでなく、此意味からして營業の基礎を充實し、單に内地同業者との對立に止らず、仕事が世界的である關係からする外國會社との競争に耐へ得るためには、どうしても協定規約の遵守と協定料率の嚴守とは、斯業經營の眞隨とならねばならぬ。徒らに自家の利害打算よりする搔つ込み主義

を捨て、各自正義の觀念に省察を缺いてはならぬ。たゞ自社契約高の多きのみを競ひ合ふ結果、營業費の濫費となり更に協定破壊の惡弊を來たすこととなる。代理店手数料の嵩み行く傾向と賣再に焦慮し行く不注意とは、一に當業當事者の至誠奈何に關るもので、各社協力の前に、協定の嚴守は易々たるのみ。と長松さんは、極めて緊張の面持ちで語ります。

地金の交際

零細な保険料の何百倍かを支拂ふ責任ある損害保險會社の經營は、絶對の周密と細心の注意を拂ふべきであり、其間決して杜撰な計畫と無謀な契約が許さるべきでない。此點に代理店當事者が顧慮する所あり、契約者各自の自制と反省となくして、たゞ安い保険料でさへあれば宜いといふやうなことでは、斯業堅實な發展向上は望まれない。我國の不完全なる建築材料からする頻發の罹災統計は、大正十二年の關東大震災を別にして、明治四十年北海道の大火、明治四十二年大阪の大火など、頗る寒心すべき事例に乏しからず、其間

堅忍自重、兀々として一步々々を固め行く東京火災の安田式經營方針は、畢竟斯界に今日あるを示す所以で「何事もネット計算を忘れては不可ません。外交の仕事に従ふ社員に向つて曰ふことですが、寧ろ初對面から地金を出すが宜い。お體裁やお世辭の附焼及では、永く顧客を待つことは出来ないし、長く友人と交際して行くことは六ヶしいのです」至誠を以て親に仕ふれば孝となり、至誠を以て君に仕ふれば忠となる。至誠を離れて道德は無い。と説くのであります。

生物の學者

長松さんは、夙に學習院に學び業を卒へて獨逸に留學し、マキシミアン大學に生物學を研究して、歸朝後學習院の植物學教授に任ぜられ、明治二十六年に東京火災が、安田家の經營に移りし以來、之が經營の任にある三十有餘年、たゞに安田家に元老たるのみならず、我國損害保險界に於ては各務、井阪二氏と共に、三巨頭の一に數えらるゝのであるが其長き年月の間、腰辨的成上り者に見る如き猜疑なく、典雅の風采と鷹揚の態度とは、嘗

て怒氣を人に移したことがないといふ。

練習の餘裕がないので、何等娛樂の趣味を有たぬとあるも、撞球は、百五十以上の技倆と評判されて居るが、其邊の消息は、一向に洩らさないものでありました。

三九、郵便配達夫たらんと志した山下恒雄氏

維新の變革

明治維新の變革は、武士階級にとつて晴天の霹靂であつた。丁髷は散切りとなり、廢刀令が布かれて廢藩となり置縣となつた。祖先以來の家祿に降れた士分の人達は、この世相の激遷に妻子眷屬を擁して、路頭に迷へりし者も尠くない。藝州藩の鎗一筋の家に生れた山下さんが、可惜武士氣質を生計の業に蹉跌して、市役所の雇員から代書にまで成り下つた父君の、苦衷を座視するに忍びず、郵便配達夫を志願して月五六圓の給料にも、なほ憧憬の眼を睜つたことに、敢て不思議はありません。

然しながら家運を挽回し家名を恢復し、以て父祖の名譽を發揚せんとする志は、親戚知己の罵むるところとなつて、笈を負ふて東上するの機會を捉へたのでありました。

保險の萌芽

同縣の親族を手頼つて東上した山下さんは、間もなく故吳文聰氏の幹旋によつて、明治生命に入社したのが十六歳の時、明治廿三年十月十八日でありました。

當時の明治生命は、木挽町の間借生活から南茅場町に移つた第一期の擴張時代であつたが、事務員數人契約高三百五十萬圓、代理店數も六十を出でない。漸く帝國、日本の兩社が呱呱の聲を擧げた頃であり、保險料の領收證書きから、簿記係契約係の主任を経て、仙臺の支店長、福岡の支店長から現在の營業主事の地位を贏ち得て、大會社の重任を背負つて立つに至るまで、實に三十有七年を閲したのである。保險國の人多しと雖、同一會社に勤續する斯くの如きは、帝國生命の城谷氏を除いて、他に其類例を求むることは出來ません。(城谷氏は、山下さんより五六ヶ月古い筈です)

野心と抱負

111

若くして家郷繁累のため人生の苦楚を嘗め、明治生命に入社の後英語學校（日本中學の前身）に學び、東京商業の夜學から更に晩年日本大學を卒業した不斷の努力と不休の勉學とは、社内第一の讀書家である。現に電車内、専門外國雜誌と辭書に親しむ態度は、自ら後進連中の敬虔的となる。衆望を一身に聚むる此人が、「矢野氏の第一生命を創設さるゝ當時、營業用の書類や統計上の材料など、私の手元から差上げたことでしたが、今日の矢野氏が隆々第一生命の社長たるのみならず、天下の名士の列にあるに比して、誠に忸怩たるものがあります」と謙遜するが「努力の前に失敗はない。志望を遠大にして徒らに目前小刀細工の猪口才を發揮せず、少くも大會社の舞臺を擔ひ去らん底の、爾く將來を達觀し來る野心と抱負とを持たざる可らず」と年少の社員を激勵するとき、自ら意氣頓に昂るものでありました。

團樂の家庭

若年、家運恢復に努力の最中、雙親を見送つた後は長子に生れた身を、骨肉のために進路を拓き、生活の安定すると共に三人の愛娘のために、慈父の愛を傾け盡して惜しまぬ山下さんの家庭は、永の年月遂ぞ諍の聲高きを近隣に洩らしたことなく、眞に文字通り春風駘蕩の和樂があるといふ。家族共に他人の是非を口にせざること、長幼の順序を嚴守して過らざることの、二つをモットーとして育てられた長息女は嫁して初孫を儲け、次女君は近く華燭の典を舉げんとし、妙齡なる三女君も亦、遠からず伉儷を得るであらう。自然の裡に伸びやかに「すんなり」と成人さする純なる子女の教育は、けに重大にして緊要な事業でなければなりません。

家庭子女の教育と同じく下僚部下のために、熱愛と温情とを吝しまぬ上から、死に身になつて此人のため、社業に盡瘁せんとする若人達の胸は、常に血潮の高鳴りを禁じ得ないであります。

附記 山下さんは、其後取締役兼營業主事に榮進したのであります。

四〇、メーアチャンスと一笑する惣崎貞夫氏

不斷の流轉

人生の断えざる流動進轉は、そこに生きんがための人の悩みと腕きとがある。保險王國に於ける事象も、この人生を餘所にして單り確乎不動の一すぢ道を、辿り行き得べくもない。人の世の流轉が、やがて保險國人の一個々々を或は窮地に之を苛み、或は苦境に之を責めつけるなど、自然の伸ばし來る自らなる配劑の手は、その眼中古人なく今人なく、釋迦も孔子も基督もなかりし青年が、意見の大小深淺を別として、宇宙間独自の個性を樹立する上に於て、一は風雲に乗じて雄飛し、一は不斷の流轉に不遇裡に身を措く。其遇と不遇とに安んずるか安んぜざるかに、其人の立命奈何が繫つてゐる。此問題に對して「運、鈍、根以外は、メーア、チャンスのみ」と一笑し去るのが惣崎さんでありました。

得意の時代

明治三十一年から大正五年に於ける惣崎さんは、藤田讓、海老原介太郎二氏と共に、明治生命の三羽鳥と稱せられ、當時の藤田氏が投資方面に、海老原氏が技術方面に手腕を發揮するに對し、飽くまで營業上に快腕を示すのが此人であつた。それが現在中央生命東京支部長の、必ずしも恵まれざる地位に、「運、鈍、根以外に、廻はり合はせといふものがある」と説く面上、明るい輝きばかりはありませんでした。

明治生命在職中に、「生命保險學提要」「生命保險代理店必携」「生命保險契約要領」「生命保險學通解」「實用生命保險論」等々、數種の著書を公にした才分は、夙に故阿部社長の信任厚きものを擔ひ、その明治生命を去らんとするや、社長の惜しんだ別離の情は、普通社員を見送るそれと全然異なるものあり、老眼一滴の露を宿したと謂はれます。

樫棒と鐵棒

「君の手腕才幹は、宛として樫の棒の如きものがある。然しながら樫の堅さを以てしても、鐵の堅牢には推かれ了るであらう。樫の堅を以て鐵の堅に對するためには、須らくゴ

ムの柔軟を外都に包装すべく、君の才幹は餘りに露骨に過ぎ一本調子に過ぎる。よろしく一抹翰味を工夫すべし」と阿都社長から訓戒され「マツチ張り渡世の者、マツチ張り技術に卓越の手腕を有つだけをして、能事足れりとすべきでない。己れの技倆以上の職工を集めて、之を率ゐる行くの徳望あるに努むべし」と誨へられた惣崎さんは、其後八千代生命に招かれて調査課長となり、東洋生命に聘されて募集課長となり、そこに豫期せざりし動因は、遂に豫期せざりし不遇の年所を経て、或は甲社に支配人たるべく、或は乙社に顯要の地位に就くべく噂されながら、中央生命に離伏する現況は、畢竟過去の名聲に自己陶醉の傾向ありしと評されます。

家庭と環境

明治二十五年慶應義塾の理財科を出で、十九年間の明治生命の前、十七年八月共済生命に矢野氏の秘書たりし以來、春風秋雨三十有餘年の保險國人たる生活中、同棲十五年の先夫人を喪ひてより、現夫人との仲に十四歳を頭に二男二女あり、何れも頭腦明晰の英才で、

學校の成績極めて優秀だといふ。子女等の訓育に氣を紛らし、過去に捉はれず將來に憧憬せず、たゞ今日現在にのみ生きる道に安んずるを説く惣崎さんは、明治生命以來蓄えたる餘財あり、以て波瀾重疊の浮世に動ぜざる恒産が、やがて目前に不平と不満なく、過ごし得る所以でもありませんか。

山形縣莊内藩士に生れて、貸費生となつて東都に遊學したりし此人の郷友には、一代の文豪高山樗牛子あり、明治生命の後進には保險界の逸足關伊右衛門氏あり、メーアチャンと説く惣崎さんの聲を、たゞ空ろにのみ聞くことは出来ませんでした。

附記 惣崎さんは、其後三井生命に囑託として、客員たる地位に甘んじて居るのであります。

四一、努力と誠意とを標榜する片倉脩一氏

片倉の社名

皿に盛れる大半の液は、鶴之を啜る能はず、壺に容れる脂膏は、鷹之を喰ふ能はず。我

國の生命保險四十四會社、その創立發起關係者の職業、緣故、地盤から各々特異の名稱を附するに腐心し、殊に長期契約に因んで、緣起の宜き社名を提けて起つ。而かも、三井、三菱、安田、鴻池等の銀行あれども、曾て經營責任者名を冠する生命保險會社は無かつた。然るに、現在生命保險會社中最後に生れた片倉生命は、自家製糸業の取引、農村二百萬戸を基礎とする片倉一家が、敢然として責任の存在を其名稱に現はし、片倉家の存續する限り全責任を負ふものなりとして、一新例を拓くのでありました。

實際の内容

大正十年十一月に創立された片倉生命が、大正十三年の創設三周年には、早くも五千萬圓の契約高を突破し、漸次其勢を以て、現に多數先聲會社を追ひ退け、同業者の中位を占むるに到つた。世間之を目して、片倉では工場の職工に對し、強制契約をさせるのであり、勞瘁せる女工の弱體者をも、顧慮するなき不良契約の多きを算するなど、取沙汰したが、同社實際契約の統計は、農業者が七〇パーセント、商業者一九パーセントに對して製糸業

者は僅かに七パーセントに過ぎない。殊に職工者の契約の如きは、三萬の従業員中八、九百人を出でない。これに就ては、「農業者を八〇パーセントまでにしたい計畫でした、が實際に當つて見ると、都市契約が容易のために、幾分農村の募集力は減殺された傾きがあります。女工の如きも、紡績事業と違つて、良家の子女が嫁入仕度のため短期勤務の希望が多いので、従つて全然問題になりませんでした」と、同社専務重役片倉さんが話すのであります。

購蘭の人々

同業他會社を壓して、異常に發展せる片倉生命の募集原動力が、屯田兵式購蘭人諸君の努力多きを閑却することは出来ない。三千の蘭買ひ連の内精銳一千五百人、養蠶時の繁忙を除いて懸命に奔走し、何等の督勵なくして少きも五千圓から二十萬圓の、一人一ヶ年の成績を擧ぐるに於て、専門外務社員及代理店も、之が競争上頼に緊張を加ふるといふ。

「私は唯、努力と誠意とを持するだけです。斯業に對する意見は、どうぞ先聲會社の諸

賢に聞いて下さい」と卑下するが、輸出の約半額を計上する生糸及之が副産物の無かりせば、日本國富の流出は、二ヶ年を待たずして危殆に瀕するだらう。と三千八百の生産業者のために氣を吐くとき、片倉さんの意氣昂然たるを見受けます。

旅行の日程

長野縣多額納税の首位を占め、直接國税五萬圓以上と稱せらるゝ片倉兼太郎氏の長男に生れ、年少時小僧達に伍して、雑巾掛けまでもした此人が、時あつて地方に出張視察の途につく場合、忽ち甲地乙地の發着時刻を明細に記入したる旅行日程が出来上り、汽車を夜間に利用して日中は事業の視察に忙がしく、假令一ヶ所に滞在するとも二日以上を要せず、それも工場の片隅に、平然假睡して奮闘する状態は、世の所謂保險關係者のお大名式旅行と、甚だ其選を異にすと云はれる。けにや製糸關係の事業地を一巡するには、どうしても八十日を要し、「宜いか悪いか知らないが、日程を切り詰められるだけ切り詰めるのが、私の旅行の流儀です」と、こともなげに話す片倉さんの家庭は、眞に人生行路の慰安所とし

て、事業に関する一切の訪客は、決して邸宅に於て接見しないのであります。

四二、幼時のやんちゃんを物語る安田善五郎氏

善用と悪用

共済生命、東京火災、帝國海上火災、東洋火災の社長にして、栃木農商銀行の頭取、東京電氣の社長、沖電氣、京濱電氣、海岸電氣、東京電力の各取締役たる安田さんは、最も能く先代善次郎氏の血を受け繼いだ人として評判が高い。「イヤそれは、常に父から叱られたことでしたよ。其の性格の特徴を善用するのが父であり、それを専ら悪用するのが私であるといふことです。然し私は父の性格を悪用して行くのが、寧ろ今日に於て、亡き親に對する孝行の一端なりと觀念して居ます」と、初對面の私に、ズバリと言ひ切る所に、力強い男性の閃きがあり、此頃流行する悪性の感冒に罹つて、遂一兩日前まで引籠つてゐた病後を、それとも見えぬ英邁闊達の氣象をさらけ出します。

利かぬ氣の強情者だと自身告白する通り、嚴格なる先代から随分烈しい折檻を受けた。長兄（當主善次郎氏）が落馬のため負傷して入院の最中、風揚げに夢中の處へ、門邊に歸り來つた父君から「病院に見舞に行つたかい」と訊かれ「これから行く積りです」「そうか寒くはないか」「寒くありません」と、其まゝ寒風に風を飛ばして居た。晚餐の席上一同食卓を圍んだ時、また「病院へ行つて來たか」「明日行く積りです」「ナゼ今日行かなかつたか」と尋ねられると、思はずも「今日は寒かつたからです」と答へ了るや否や、突如倉の中に放り込まれた。事情を詳知せぬ母堂が、色々に取り倅して倉の錠前を開けて見れば、平然砂糖盃に手を突つ込んで居た杯といふ逸話は、當年の安田さんを彷彿させるのであります。

四、五歳のとき、廊下で轉んで右腕を挫き、千住の名倉醫に通ふ條件に、必ず淺草仲見世で風を買つて貰ふことに極めて、此の條件の徹底的勵行は、遂に一百五六個の風が、俾

夫部屋に充滿するに至つたと謂はれます。

強固の意志

我慢強い意思の強固は、安田さんの親譲りの特徴で、曾てサツクの中に十五、六種の菓を詰め込み、數島一個の外に兩切三十本を、毎日欠かさず常用した愛煙癖を、時あつて断然廢止して二ヶ年、些の苦痛の色なき如き、決して普通人の企て及ばざる天資と稱すべきであります。

壯年時代酒にも食にも嗜好を持つた先考が、時に全く盃と煙管を手にしなかつた事から、茶の湯と謡曲に没頭する前、一中節やら歌澤やら、義太夫やら尺八やらにまで深き趣味を有し、悠々閑日月のありし半面を語るとき、そこに悲痛と哀惜の情なしには、之を聞くことは出来ませんでした。

時間に几帳面にして、客を待つこと慇懃なる二大特徴が、先代生き寫しだとされる安田さんを「軌道の上を駛る馬力の強い汽罐車だ」と、或人の云つた一言は、洵に適評だつた

と想ひます。

先代の随行

先代善次郎氏の旅行には、令息達が交る／＼随行したが、「道中は、三郎（安田さん幼時の通稱）が一番宜い」と無二の氣に入りであつた。長兄は温厚篤實のために、令弟（亡義雄氏）は餘り如才なきために面白くなく、唯、安田さんの氣象が、こよなく張合があつたに違ひありません。

擊剣に柔道に、庭球に野球に、乗馬から水泳、六尺棒術まで體得し、圍碁、將棋には素人の群を抜き、殊に撞球に至つては、斯道の横綱以上たる此人が、富貴の家に生れて、天真流露の赤裸々を、十二分に發揮し得る恵まれたる環境は、やがて更に大をなすべく、「私是一個の人形に過ぎない。ただ周囲の者が擔ぎ廻つて呉れるだけです」と、何等紛飾もなく言ひ放つて微笑む顔は、私の腦裡に印象深く残るのでありました。

四三、ガーデンホームに心血を瀝ぐ今泉文吉氏

富士の秀麗

中野の東京市結核療養所に隣接した所に、基督教主義に依り、結核病患者救済のために緊要なる施設を見るのが、英國人タブソン女史のガーデンホームであります。

此ホームは、患者をして田園生活に親しみ、自然の間に慰安を得しめ、失望落膽の境地から、光明希望の輝ける生活に導かんとするのであつて、輕症の患者は、一堂に集つて食事を取り、明るい廣々とした食堂の西向の窓からは、富士山の秀麗壯大の風景を見渡す事が出来ます。

娘の患者達は、花や鶏の世話をしながら、春の日の來るを只管に待つてゐる。より廣い眼界を見開いて、より新らしい希望を以て、古きに代えしむるのが、此ホームの使命であります。

肺病の蔓延

一五八

タブソン女史は、日本に在留する四十年、夙に肺病の我國に禍するを慨し、燃ゆるが如き人類愛から献身的の努力を續け、遂に英國婦人二名より一萬圓の寄附を得たるを筆頭に、長くも故有栖川大妃殿下の御下賜金、徳川侯爵の南葵音樂會の収益、女子學習院常盤會の大震災善後會、木曜會、愛隣婦人會等、其他各所のバザー、又は内外篤志者の援助あり、井上侯爵夫人からの特別寄附金一萬圓の外、東京市の同情によつて、用材及び建築費の下附を得て、この中野一千六百坪の地に、わが國の同胞、男七、八十名、女四、五十名の患者を收容してゐるのが、ガーデンホームであります。

けに統計の数字の示す所によれば、我國に於ける肺結核患者は、大凡百萬の多きに達し、毎年十萬人の同胞は、之がために斃れるのである。而かも其蔓延は、更に益々甚だしきを加ふるのであります。

保険の収益

此事業を翼賛し、これが實行方面に没頭するのが今泉さんで、此事業資金を獲んがため三菱海上、日本火災の代理店を引受け、近く大正海上と明治生命とも及ぶべく、之が収益全部を、人類救済のために投ぜんとするのであります。

井上侯爵、珍田伯爵、爪生男爵及關屋宮内次官各夫人を中心とする貴婦人連の、「いづみ會」保険部は、敢然起つて之が聲援を吝しません。宮内省管下の契約物件二千萬圓、東京及附近の親戚知己友人十萬人を辿る外、全國に四十二萬の誌友を有する希望社の、後藤靜香氏の共鳴應援するあり、單に肺病に限らず、癩病患者聾啞者に至るまで、救済の出来るだけ手を盡して行かう、と謂ふのが今泉さんの考へであります。

積極的に勧誘して歩かなくとも、此意氣と此目的に對して、自ら進んで電話なり書面なりで、契約の申込をして來るのである、と今泉さんは語ります。

聖徒の氣魄

明治四十四年獨逸に伯林大學に學んで、大正二年より三ヶ年間を、早稻田大學に保険政

策の講座を受持つた此人は、栃木縣は足利の産、幼少二才にして、肺患のために什れし父君を持つた。曾ては一、二銀行の専務重役たり、北海道に於て農業、牧畜、植林に手を染むる七年、時あつて大悟、没我の心境は、私慾と功名心と權勢とに打克つて、四十年間の牧羊から、身を起こした聖教徒モーセの氣魄を、想見させるのであります。

獨逸に於て、サナトリウム療法を見聞し來つて、之を實現するに至つた今泉さんから、聖アンデレ聖公會の神學院長神學博士故今井壽道氏の洗禮を受けた話、節約と努力とによつて、目的に精進するのみである哲理を抱持し、事の成敗利鈍を眼中に措かず、惱める者のためには、身を挺して起つ。成さんと欲すれば、必ず成し遂げ得らるゝものであり、望めば必ず與へらるゝものであるといふ信念の話、を續々聴くことが出來ました。

四四、三夫妻團樂の家庭を楽しむ竹友安治郎氏

無二の慰安

山村雪なほ深き如月、そゞろ馥郁の梅花を思ふ。溪谷の水なほ凍るころ、春に魁けて南枝先づ薫じ、鶯の囀する妙音は、人をして爽快を感じしむ。竹友さん夫妻が令息夫妻と愛孫二男、令嬢夫妻と愛孫二男、の三夫婦揃つて一家に暮らす睦み合ふ團樂は、話に聴くだけに欽羨に禁えない。令息は京都帝大出の英才、米國コロンビア大學に學んだる英文學者たり、令嬢は京都同志社女子部出身の才媛たり、何れも固い信念に燃ゆるクリスチアンであるのだ。「男子鬪を跨げば、七人の敵に狙はれるといふ世の中に、家庭は眞に唯一無二の慰安所でなければなりません」と説く竹友さんは、東海生命の取締役兼支配人であります。

體得の妙語

大阪に生れて、佛教の信仰深き父と儒學の造詣深き師とによつて成人し、夙に育英の事業に志したが、世は日清戦後の、實業勃興の機運につれて、周圍の環境が此の目的に副はず、神戸の日本貿易銀行、大阪の百三十銀行安治川支店長から、日露の戦後、紡績事業、電車、瓦斯と、轉々各方面に出頭没頭し來つた竹友さんの哲學は、一定不變の軌道を辿つ

て、以て人生を渡るべきであり、當初の決意と立志の目的とは、飽くまでも初一念を貫くべく、器局の大小自ら天稟あるにしても、一路の邁進は、利害消長を顧みすべきでない。但、對人の信用に最も重きを措き、時に阿堵物に恵まるゝ薄き境遇にありても、人格と誠意の進るところ、自ら處世の險難を突破し得べし。然諾の前には、身を犠牲にして行くべし。といふ歸結は、有り觸れた簡単な話だが、鬢髮霜を戴く此人の言葉として、その一句々々が體得の妙語と聽かれます。

露骨の告白

明治四十二年、松方氏の作つた京都の嵐山電車に、關係するに至つて以來同氏の恩顧を受け、大正四年十月、同じ系統の廣島瓦斯會社支配人の榮職を去つて、松方五郎氏の社長に就任と共に東海生命に入り、今日まで一意胆勉の實を擧ぐる事となつた。これが竹友さんの保險國人となれる機縁であります。

其當時に於ける東海生命は、前重役者經營上の失態あり、岌々乎として危き社運を擔ふの觀あり、この時局を收拾せんため評議員多數の希望に基き、松方氏が平取締役から身を挺して社長に就任するに迫り、着々として今日の盛運に向つたのであるが、十二年の過去を顧みて、「其頃の私は、保險に對する希望も抱負も、現在ほど眞剣に考へて居ませんでしたよ」と、斯業に着手したこの時分の感想を、露骨に此人は語ります。

保險の神聖

創業四、五年にして、漸く責任準備金二百七十萬圓を擁するに過ぎざりし社業に就て、前重役經營の焦燥は、一躍表面四千萬圓の數字となつて現れたが、意外に死亡率の高きを致し、延いて收支計算の壓迫を蒙つた。依つて寧ろ大量契約よりも、先づ内容充實に努むべしといふ社是が、松方系新重役の堅き決心の下に實行され、内部整理に三、四年を費して、疾くに發展し得べき進境を、却て消極的に隱忍の時期を経たる結果は、やがて現に十四萬何千圓かの剩餘金を贏ち得るまでの苦難を嘗めた今日、けに更生一新の佛あり、澎湃たる時流に超然として、斷乎潑刺の意氣を示し得たる事、一に現重役者の没すべからざる功績

である。「保険は、神聖の事業也」「保険の経営は、生活の手段にあらず」「保険は、平和の救ひの手也」空飛ぶ鳥も野を走る獣も、此心を以て見るべきであらうと論ずるとき、此人の頬の熱し来るを見受けます。

附記 其後、竹友さんは會社を勇退し、閑雲野鶴を俱として居ます。

四五、自己一代主義なりし名取夏司氏

思想の相續

嘗て憲政の先覺者たる故板垣伯が、華族一代制を唱道して、その繼嗣が此素志を實行し得たるは、ごく近年の事である。茲に説く名取さんが、結婚後十年子實に恵まれず、養子をするは億劫であり、自己一代と腹を極めて、自分達夫妻亡き後は、遺骨を郷里信州に葬るべく覺悟をした翌々年、圖らずも令閨が、玉の如き一男を儲けて今年五歳になる。汎き意味の人類愛から、單に血族者の相續人に重きを措かず、思想の相續者と事業の相續者と

を求むるのが、此人の持論である。けに南米の一高原に芽生えたコスモスが、全世界到處に咲き誇る状態を想へば、寧ろ偏愛の子煩悩は、之を嗤ふべきでありませう。

行火の車夫

名取さんは、帝國生命の専務重役であります。

一昨年、保險國人として同社に第一步を踏み込む前、知己友人數百名に對して、「夏司に對する御友情記念」として「一般生命保險業者への御希望」「如何にして現在御繼續の生命保險に御加入なされしや」「貴下の御面會の保險外務員の勸誘振りに對し、感心せられし事例と、御不快を覺えられたる事例」「帝國生命に御契約の有無、及其營業振りに對する御批評、その他御注意の事項」の四問を徴した眞劍振りには、他社が幹部課長級の人物を、自動車を以て送迎する時代に、行火に尻を焙るヨボヨボ爺いを、白木屋の近邊から呼んで來る以外に、俾の帳場を其頃持たぬといふ程の、儉約質素振りの社風に、可なり刺戟を與へた事と想ひます。

日支の提携

二六

明治三十八年、早稲田大學の大學部政治經濟學科を卒業した名取さんは、同窓間の論客である。日支提携を徹底的に實現せんとして、夙に支那方面の貿易に志し、之がためには特に第二外國語として、支那語を青柳篤恒氏と學び、田邊郁太郎氏（現青島岩城商會代表社員）や牧山耕藏氏（現代議士、朝鮮新聞社長）等と清韓協會を起こした。然しながら此人の運命は、先輩故昆田文次郎氏と當時の學長高田早苗氏との慫慂黙し難く、遂に「銅を採掘し支那に輸出してゐる」關係から、入つて古川家の事業に參與することになりました。而して鑛山の生活は、採掘や選鑛製煉工作ばかりでなく、購買組合もあれば信用組合もある。衛生、醫局、運搬有らゆる設備と機關の備はるに、寧ろ社會の一縮圖たる鑛山の現場を志願して、秋田縣は阿仁鑛山の事務長より、大良支山長たる十年に迫りました。

直接と間接

社會の事業を直接と間接との二種に分つとして、農業、工業、及鑛業の直接事業方面た

る鑛山生活十年と、旭電化工業の重役として化學工業に盡した十年とが、遂に間接生産事業たる人類相互扶助の、至大至高の保險業に落ち着いたのであるが、較もすれば自己的に個人的に傾かんとするデモクラチックの現代を、力強き皇室中心主義に依つて同郷、同級、同窓、同輩及同志の間に、多年高唱し來つた人類相愛の理想をば、此保險事業を通じて、實現せんとする事になつたのであります。

一番悲觀すべきドン底と、一番樂觀すべきテツ邊との兩極端を睨み合せて、些の不安なく過去の事業に格勤し來つた名取さんが、まだ保險協會にも碌々挨拶に行かぬ前を、毎日社員の一三名宛を交代に、晝餐を俱にして顔馴染みに努むるなどは、洵に興味深い事です。

由來「人間に興味を有する」此人の、白晝一鳥啼かざる山深き鑛區生活の追憶も、亦更に興味多き事でありませう。

四六、京都市政を取り裁いた川村鉦次郎氏

市民の矜持

明治三十八年から四十一年までの京都市民は、市尹として大西郷の遺児西郷菊次郎氏を戴いた。由來京都は、閑雅典麗の地、較もすれば優柔不斷の譏を免れざるの地、それを西郷市長を補けて、京都の三大事業を遂行したのが、當時の高級助役川村さんでありました。京都の三大事業といふのは、道路の擴張及電鐵の敷設であつた。第二疏水工事の完成であつた。而して水道工事の完備であつた。幸にして京都の電鐵は全國に率先して實現し、疏水工事は、之が電力を供給するの役に立ち、水道工事の完成と共に、大正天皇御即位の大典に於て、遺憾なくこの功績を發揮し、市民の大きな負擔は、豫期以上に酬らられたのであります。

人事の機縁

明治二十七年、東京帝國大學政治學科を卒つた川村さんは、大藏省に一ヶ年任官し、大阪に銀行業に關係する十年餘、其間、支店開設のため臺灣視察に行きたる途上、會々總督府に在りたる西郷氏と相識り、遂に西郷氏の市長たるに迫んで、之が助役たるの機縁を結んだのであります。

京都市政を去つた明治四十一年から大正九年の三月まで、滿鐵の大舞臺に理事として手腕を揮ひ、茲に端なくも此人の保險國に來る動因を作つた。といふのは、橋本萬右衛門氏の令弟萬之介氏と、朝鮮銀行理事たる前、大連支店長時代に惻交あり、橋本氏が大安生命社長として實權を收むると同時に、専務取締役として一昨年斯業界に歩を進めたのである。直接従業員壹萬人、埠頭の貨物運搬の人夫壹萬五千人を統御し來つた經歷の快腕は、眠れりし大安生命を如何に覺醒し行くでありませうか。

投合の意氣

信州田ノ口藩士として生れた川村さんは、慇懃丁寧といふ文字が、此の人のために出來

たものではないかと想はるゝ底の性格の持ち主であるが、會津出身の帝大同級の一親友から橋本氏の新事業たる保険方面に、經營を共にせんことを慫慂され、なアに人間を相手にする事業を、同じ人間に出来ないことはないかと勵まされ、遂に社長と意氣投合するに至つた経緯を、ポツリポツリと話します。

「誠心と誠意を以て事に當らば、いかなる事業でも早晚其の効果の擧るものであり、不忠實を以て事に當らば、必ずや結末に於て破綻暴露するものである。正しき道を歩一歩づゝ辿り行かば、以て大過なきを期し得られやう」といふ言葉は、洵に平凡に過ぎぬが、此人から聞いて意義がある。單に一場の處世訓として、なく大安生命の前途が、之によつて裏書きされる感があります。

銃獵の断念

圍碁、將棋その他何によらず一通りの趣味を有つが、銃獵は、震災以來之を止めた。蓋、既得過ぎる娛樂と感悟したからだ。と説くが、家庭は、十七歳の令息を頭に四男一女あり、

「決して偉大なる人格者とか、卓絶したる天才家とかを望みません。たゞ自然人として善良性であれば宜い。善人であれば宜い。從て子女の教育に關しては、局部的の干涉を一切避けて居ります。之が私の流儀です」の語は簡單だが、温厚篤實其者の如き性格の、保険事業家として相應はしく、自己宣傳と自家廣告に没頭し、虎狼の如き咬み合ひを敢てする新業界にあつては、洵に意義ある存在でなければなりません。

四七、事業と人物の哲理を説く富永義孝氏

秀吉と信長

一世の英雄豊臣秀吉は、生れて英異なれども父を失ひて、貧なる繼父のため人の奴となる。至る所數月にして去り、尾張美濃の間に轉徙し漸く二十歳の比、遂に遠江に於て土豪松下之綱の家奴となる。幼名の日吉丸を與助と呼ばれて、其才幹を愛でられたが、今や天下織田信長に非ずんば、與に功名を成すに足る者無し、と慨して之に奔り、姓名を木下藤

吉郎と改めた。卑賤から起つた此藤吉郎が、度々の戦功で一方の大將となり、信長の戦死を聞いて討伐中の毛利と和睦し、京に上つて光秀を破り、賤ヶ嶽の一戦に信長統一の事業を完成したる後は、四國の長曾我部、九州の島津を降し、越後の上杉、關東の北條等、凡て大河を決せし如き勢で天下を風靡し、終に應仁以來百二十餘年の大亂を鎮定して、關白に任せられ豊臣の姓を賜り、太政大臣に擧げられ隱居して太閤となつた。これは是れ、秀吉と信長の人和である。と説くのが生命保險會社協會の書記長富永さんであります。

立身と出世

凡ての事業も凡ての功名も、天下國家の經營も要は相手の人物を見抜くにある。その人の地位にあらず肩書にあらず、眞に爲すあるに足ると洞察し得た人と組んで、初めて浮世の立身があり出世がある。碌々屑々の徒と知らずして事業を共にせば、その事業は成功しない。三井、三菱の彪大を以てしても、逸足駿才の適材なくば以て見るに足るべきでない。但、天下卓越の士を鑑別するの明と之に會通するの機運とは、やがて其人に備はる天資で

もあらうか。「私なんぞは、人を標準にするを度外に措いて、或は逓信省より内務省が宜からう抔と、仕事に基礎を於てのみ左顧右盼したる結果が、遂に今日の失敗ある所以です」と富永さんは明けすけに告白するのです。

仙臺の局長

二六時中の大半を雑用に追はれて、新聞雜誌記者の應對から時に何々暴力團の無心合力にも、自ら出で、面談する忙がしき境遇を「現代事業界の大立物や各方面知名の人に會ふ機會があるので、職業としての慰めがあります」と、大に悟り濟ますが如き觀ある此人も、明治四十三年法政大學に在學中、高等文官試験に登第し、下村宏氏の貯金局長時代に貯金局に簡易保險制度調査に没頭し、今第一生命に居る石坂泰三氏と前後して高等官に進み、仙臺やら廣島やらの郵便局長から逓信課長たりし時代を回顧すれば、必ずしも今昔の感のないでもありませんまい。

大正九年逓信局を辭して以來、半浪人と稱する時代に、或は東京帝大に高等官待遇の囑